公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント
報 告 書 2012

2013 年 3 月

教育学習支援チーム

はじめに

本学が 2007 年に公立大学法人に移行して以降，従来の FD 委員会は「教育・学習支援チーム」として再編され，引き続き授業評価，研修会への参加，外部講師を招いての講習会，公開授業の拡大など積極的な取り組みが行われてきました．この間，ご協力いただいた学生・教職員の方々にはこの場をお借りして感謝の意を表したいと思います．

しかし，本学の取り組みには，依然として改善の余地が残されていることも認めざるを得ません．教育担当副学長として，過去 3 年間の経験を通じてこのことを痛感しています．これまでのチーム会議では，「授業評価結果を第三者評価にゆだねる必要があるのではないか」，「授業評価の低い教員への何らかの対応が必要なのではないか」，「授業公開と授業参観を義務付ける必要があるのではないか」，「学生の自由記述欄には取り上げるべき重要な指摘があるのではないか」，「授業評価結果に対して教員はきちんとコメントを返すべきではないか」，「各学期の早い段階で学生の授業理解度を把握する試みを行う必要があるのではないか」といった問題提起を行ってきました．これらの意見のうちいくつかの項目については，各部局での議論をお願いしたところでありますが，各部局での議論は概ね否定的なものであったように見受けられました．

結局，これまで新たに実現した試みとしては，授業評価に対する全教員のコメント欄を設け，コメントが行われなかった場合にも空欄のままホームページに掲載するというものにとどまりました．しかしながら，この試みとて，改善といえるほどのものではなく，本来は当然のことと言えなくもありません．

本年四月からスタートする第 2 期の中期計画では，「教員の教育力の向上」という目標達成のための措置として，「学生の理解度を把握するための試みを導入し，授業改善を行う」，「FD 活動の結果を公表し，授業のさらなる改善を促す」，「教員懇談会を定期的に開催し，情報と教育手法の共有化を通じ，教育に関する教員の連携を強化する」などの項目を掲げています．これを受けて，2013 年度には，「学生の理解度を把握するための試みを行う」，「FD 活動の結果について，部局長が把握する体制を整備する」，「教育力の向上，授業改善に向けて教員懇談会を定期的に開催する」という年次計画を作成しました．各先生方におかれましては，年次計画のすみやかな実行にご協力いただくようお願いする次第です．

大学を取り巻く社会的な環境が一段と厳しくなる中で，われわれとしても早急に主体的な取り組みを示す必要に迫られております．本報告書をたたき台として，教員の皆様一人ひとりが，改めて「教育力の向上」に真剣に取り組んでいただくよう切に願っております．

最後になりましたが，本報告書の取りまとめにご努力いただいたチーム委員・事務局の皆様とリーダーを務めていただいた加藤久晴先生に，心よりお礼申し上げます．

2013 年 3 月　　教育・学習支援チーム代表　　坂田幹男

目次

はじめに ---------- i

1. 活動概要 ---------- 1

1.1 委員の構成 ---------- 1

1.2 会議録 ---------- 1

1.3 FD 事業経費 ----------14

1.4 事業の実施状況 ----------15

1.4.1 授業評価 ----------15

1.4.2 授業公開 ----------24

1.4.3 FD 研修 ----------25

2. 各部局の FD 活動 ----------27

2.1 経済学部 ----------27

2.1.1 授業評価アンケート----------27

2.1.2 授業公開 ----------28

2.1.3 演習 I・II 担当者懇談会----------30

2.2 生物資源学部 ----------32

2.2.1 授業評価 ----------32

2.2.2 授業公開 ----------33

2.2.3 授業改善のための工夫 ----------33

2.2.4 FD 研修 ----------43

2.3 海洋生物資源学部 ----------45

2.3.1 授業評価アンケートの結果と対応 ----------45

2.3.2 授業公開 ----------45

2.3.3 FD 研修 ----------46

2.4 看護福祉学部 ----------47

2.4.1 授業評価 ----------47

2.4.2 授業公開 ----------48

2.4.3 FD 研修 ----------49

2.5 学術教養センター ----------55

2.5.1 授業評価 ----------55

2.5.2 授業公開 ----------55

2.5.3 FD 研修 ----------56

3.　点検と課題 ----------57
3.1 授業評価 ----------57
3.2 授業公開と研修 ----------58
おわりに ----------63

1.　活動概要

1.1　委員の構成

チームの規定（規定第 12 号）により教育担当理事をチーム長とし，メンバーを理事が選考する．2012 年度のメンバーは，以下の 12 名の教員と 5 名の職員である．

2012 年度チーム委員名簿

氏　　名	所　　属	職	役　　割
坂　田　幹　男	理事（教育担当）	副　学　長	チーム長
清　水　葉　子	経済学部	准　教　授	委員
福　山　　龍	経済学部	准　教　授	委員
加　藤　久　晴	生物資源学部	准　教　授	チームリーダー
石　川　敦　司	生物資源学部	准　教　授	委員
加　藤　辰　夫	海洋生物資源学部	教　　授	委員
水　田　尚　志	海洋生物資源学部	准　教　授	委員
深　沢　裕　子	看護福祉学部	准　教　授	委員
塚　本　利　幸	看護福祉学部	准　教　授	委員
島　田　洋　一	学術教養センター	教　　授	委員
山　川　　修	学術教養センター	教　　授	委員
亀　田　勝　見	学術教養センター	准　教　授	委員
白　崎　雅　義	教育・学生支援部	部　　長	事務局
江　藤　寿　之	教育推進課	課長代理	事務局
大　野　史　博	情報ネットワーク管理室	室長代理	事務局
遊　津　安　司	企画サービス室（小浜Ｃ）	主　　任	事務局（小浜 C）
村　崎　明　子	教育推進課	主　　任	事務局（福井 C）

1.2　会議録

■ 第 1 回会議録

日時　平成２４年５月３０日（水）１４：４０～１６：１０

場所　福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV 会議室

出席　坂田，福山，加藤$_{久}$，石川，加藤$_{辰}$，水田，深沢，塚本，島田，山川，亀田
　　事務局（白崎，江藤，大野，遊津，村崎）

欠席　清水

１．チームリーダーについて

坂田副学長より，資料に基づいて今年度のチーム員が紹介された．チームリーダーについては，２年任期とすることが慣例化しているため，昨年度に引き続き，生物資源学

部の加藤久晴准教授にお願いしたいとの意向が示され，承認された．また，これまで，経済学部，学術教養センター，看護福祉学部，生物資源学部の順でチームリーダーを選出しており，来年度は，経済学部の委員に就任いただきたい旨，確認がされた．海洋生物資源学部については，遠隔地であり打ち合わせ等において不便な場合があるため，チームリーダーを選出しないこともあわせて確認された．

２．ＦＤ事業について

①　2011 年度事業のまとめ

資料に基づいて事務局より授業公開，学内・学内研修，授業評価の実施結果について報告された．

坂田副学長より，授業評価を行わない場合は，不実施理由書の提出を徹底していただくよう，依頼がされた．また，評価に対するコメントも必ず提出することおよび「コメントなし」の場合も必ず報告していただくよう依頼がされた．

加藤久チームリーダーより，海洋生物資源学部の後期における授業評価結果が低下していることについて状況の説明を求めたとところ，加藤辰教授より「過去のデータを分析するとともに，教員に対してアンケート調査を行い，原因を調査しているところである．」との対応が示された．

②　2012 年度事業について

②－１　2012 年度　ＦＤ実施事業予算について

資料に基づいて事務局より報告された．研修等で必要な予算については，早めに事務局まで相談いただくよう依頼がされた．

②－２　2012 年度授業評価について

(1)　2011 年度の問題点と改善意見

2011 年度の FD 報告書の内容をもとに坂田副学長から以下の意見が述べられた．

○「コメントなし」はできるだけ避けてほしいと依頼しているが，経済学部の一部からは，「だれが記入したかわからないようなものにコメントはできない」というような意見もある．他大学では，アンケート調査を記名式にしているところもある．教員に渡すときのみ名前を伏せる，選択回答部分のみ無記名にして自由記述欄を記名式にするなど，様々な方法があると思う．記名式のメリット，デメリットがあるかと思うが，今後，記名式にできないか各部局で議論していただきたい．

加藤久チームリーダーより，記名式にするかどうかということは，前回のチーム会議においても議論されており，学生に真剣に回答してもらうという趣旨があるとの説明がされた．

委員より下記の意見が出された．

- 氏名を記入する場合と学籍番号を記入する場合では，学生のプレッシャーが違うと思う．学生を特定したいのであれば，氏名ではなく学籍番号でよいのではないか．
- 用途を明確にしたうえで行うべきである．

○各教員の授業評価結果および自由記述意見欄を部局長が閲覧することができないか各部局で議論していただきたい.

今年度から教員評価が試行されるが，その中には授業評価に関する項目が入ってくるため，判断材料として必要となるのではないか．部局長が授業評価の結果を知ることができないまま評価ができるのか．学生が提案した内容が，担当教員本人しか見ることができないために実現できないようなことがあるのではないか.

委員より下記の意見が出された.

・ 学部長が授業を評価できるのか.

→坂田副学長より，評価でなく，参考資料としての位置づけであるとの説明がなされた.

○調査を実施しない場合は，不実施理由書を必ず提出していただきたい．理由に明らかに合理性があるものは，事務局による判断で構わないが，そうでない場合は，坂田副学長が判断する.

(2) 2012 年度の対応

前期授業アンケート実施日程

原則として 7 月 9 日（月）～7 月 20 日（金）【補講期間の２週間前】

方法については，従来どおり実施することが確認された.

②－３ 2012 度授業公開について

(1) 2011 年度の問題点と改善意見について

これまでの議論をもとに,坂田副学長から以下の内容を各部局で議論していただきたい旨，依頼がされた.

・授業公開，授業参観の実績は今後重要な意味を持つと思われるため，今後，授業公開および授業参観を学期毎に一度は教員に義務づけることについて，議論いただきたい．授業公開，授業参観の義務付けは，次期中期計画に掲げたいと考えている.

委員より下記の意見が出された.

・ まずは，授業公開および授業参観の効果について議論した方がよいのではないか.
・ 随時公開とするか日程を決めて公開するかなど，やり方はいろいろ考えられる.
・ 授業公開はともかく，授業参観は負担となることがあるため，分けて考えた方がよいのではないか.

これらの意見に対して坂田副学長より下記の意見が述べられた.

・ 授業公開は，トップダウンで指示が降りれば，やらざるを得ないが，授業参観は，各部局での議論の余地があると思う．授業公開は，学術教養センターと看護福祉学部の一部は，随時公開を行っているので，主にその他の学部で検討いただくことになる.
・ マンネリ化している現状を打破し，ステップアップすることを考えなければならない.
・ 授業参観は，参観後，反省会を行っていただくとより効果的である.
・ 授業公開，授業参観以外のよい方法があれば，あわせて検討いただきたい.

(2)　2012 年度の公開計画

・2012 年度における各部局の授業公開の方針等は，F レックス SNS コミュニティサイトになるべく早く書き込む（アップする）よう，加藤久チームリーダーより依頼がされた.

②－４　2012 年度ＦＤ研修について

(1)　2011 年度の問題点と改善意見について

坂田副学長より，昨年度，小浜キャンパスで行った研修は，福井キャンパスの教員の参加が非常に少なかったが，今後，全学を対象にしたＦＤ研修を行う必要があると思うとの意見が述べられた.

(2)　2012 年度の研修計画

〇部局で予定されている研修について深沢准教授および塚本准教授より説明がされた.

両学科とも，学科教員が主な対象となるが，全教員が参加できる部分もあるので，アナウンスは全学対象で行うことが可能であるとの説明がされた.

・看護学科

【内容】実習，授業についてプロジェクト学習，ポートフォリオを使う場合の課題等について

【講師】千葉大学教育学部特命教授　鈴木敏恵氏

・社会福祉学科

①【内容】実習スーパービジョンのあり方について

【講師】東京国際大学人間社会学科准教授　村井美紀氏

②【内容】他府県避難者のニーズと支援について

【講師】未定

〇今年度のＦＤ合宿研究会について，加藤久チームリーダーより説明がされた.

・【日程】9 月 3,4 日

・【場所】仁愛女子短期大学

詳細が決まり，チラシができ次第，配布予定.

③　アンケート調査対象外科目について

加藤久チームリーダーより，アンケート調査対象外となる科目について確認および提案がされた．資料に記載されているものは，すでに調査対象外となっているものであるが，オムニバス授業科目は，数名の教員が授業を担当するが，最後の教員の評価になりがちであり，取りまとめの教員とリンクしていない場合があるため，調査対象外としてはどうか，調査を実施したいという場合は，実施可能であるとの提案がされた．特に異論がなかったため，承認された.

委員より，下記の意見が出された.

・学術ゼミ等は対象外となるのか.

→事務局より，通年科目における演習教科等が対象外となり，通年科目でない学術ゼミ等は，対象となっている旨の説明がされた．あわせて，少人数のゼ

ミ等では，回答者が特定されるため，調査を実施しない事例はあるとの説明がされた．

・なぜ，演習を対象外とするのか．

→講義科目を改善する努力を行えば，他の科目についても波及していくため，効果が上がるのではないか．

・講義と演習では全く手法が異なるので，分けて実施した方がよい．演習を除外する意味がよくわからない．

これらの議論を踏まえて，坂田副学長より，当面は，通年科目における演習等を調査対象外とすることとするが，再度，経緯を踏まえ検討するとの説明がされた．

３．大学生意識調査アンケートの今年度の実施方法について

山川教授より，実施方法について以下の提案がされた．

・昨年度はネットワーク上でアンケートを実施したが，２～４年生の回答者数が非常に少なかった．１年生については，情報演習の中でLMSを使用しているため，回答者数が多かった．日常的にLMS を使っていない学生に，このアンケート調査を行ってもらうことは難しかったのかもしれないので，今年度は，紙媒体でアンケートを記入してもらい，集計（データ入力）は大学が行い，解析についてはＦレックスが行ってはどうか．

・今は無記名で行っているが，今年度は記名式にして学生に結果を返してはどうか．

以上の点について山川教授より，後日，説明文書を配布するので，各部局で検討いただきたいとの依頼がされた．

データ入力の手法については，費用を勘案し，事務局で検討することとした．

坂田副学長より，予算がない場合は，昨年度と同じ手法で行うしかないであろうが，昨年度は経済学部において周知が非常に遅れたという状況があったので，早めに周知を行えば，回答者数は増えるのではないかとの意見が述べられた．

４．その他

① 次回チーム会議開催予定

第２回会議は１０月上旬に開催予定．

坂田副学長より，本日，提案した件について各部局で議論していただいた結果については，中期計画に反映することになるので，事務局を通じて必ず報告していただきたいとの依頼がされた．

■ 第２回会議録

日時　平成２４年１０月１９日（金）１４：４０～１６：３８

場所　福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV 会議室

出席　坂田，清水，境（代理），加藤久，石川，加藤辰，水田，深沢，山川

事務局（江藤，大野，遊津，村崎）

欠席　塚本，島田，亀田，事務局（白崎）

１．ＦＤ事業について

（１）前期授業評価結果について

事務局より，資料に基づき，前期授業評価実施状況について説明がされた．学部については，参加教員・参加科目ともに，昨年度に比べ，若干，実施率が下がったが，一昨年度よりは上昇しており，推移を見ていく必要があるとの説明がされた．大学院については，近年，上昇傾向にある旨，説明がされた．

次に，資料に基づき，学部の部局別の数値結果の推移について報告がされた．

坂田副学長より，県評価委員会から「学生の授業理解については，学部間で差が生じているので早急に原因を解明し，必要に応じて改善すること」との指摘を受けているとの説明がされた．例えば，海洋生物資源学部では，近年，内容理解の数値が下がってきており，生物資源学部は，数値は上がってきているが，全部局の中で一番低い結果となっている．このことについて，内容理解については，部局の事情もあるため，チーム員が中心となって原因を分析し，対策を講じていただきたいとの依頼がされた．

加藤久チームリーダーより，「教員が期待するほど学生の意欲は高くない．授業のレベルを上げるという考えもあるが，学生のレベルに合った授業にするという考えもある．」との意見が述べられた．

坂田副学長より，「個別の授業について数値結果を見ることができるのか．」との質問に対し，事務局より，「数値結果の公表を承諾する教員の授業については見ることができるが，公表を承諾していない教員の授業は見ることができない．」旨，説明がされた．

坂田副学長より，「今後，内容理解が著しく低い授業についての対応策を議論していただきたい．数値が 3.0 を下回っている生物資源学部と海洋生物資源学部について，特に考えていただきたい．」との依頼がされた．

委員より，下記の意見が出された．

- 単純に数値を比較することはおかしい．同じ教員が担当している授業間においても，例年，数値に差が出る授業がある．
- 授業そのものは変わっていないけれども，学生の質が変わってきているという意見もある．

  →数値に差があることについて，きちんと説明できればよい．数値が低いから必ずしも悪いというわけではない．学生の質に関しても，基礎学力が低下してきているというような分析ができるのであればよい．基礎学力の低下についてどのような対策を考えるかは，次の話である．

  →海洋生物資源学部については，既に補習を実施しているが，補習のための補習をしなければならないような状況もある．
- 3.0 を上回らなければならないというような数値目標が出ると，内容のレベルを下げて数値を上げようという考えが出てくるかもしれない．また，抽象性が高い科目は，どうしても数値が低くなり，逆に具体性の高い科目は，数値が高くなる．
- 海洋生物資源学部では，特に，後期の数値が低くなってきているため，個別に分析をした結果，１年生必修科目で抽象性が高い科目は，数値が低いということがわかり，改善策を検討している．必修科目であるため，選択科目にするかということは合意がされていないが，授業が理解しやすくなるよう工夫する．ただ，海洋生物資源学部では，年次が上がるごとに数値は上昇している状況がある．

事務局より，今後，授業ごとの数値結果を分析するのであれば，結果の公表を承諾している教員の授業しか分析することができないので，このことについては，次の議事「今後の授業評価の実施について」で引き続き議論していただきい旨，説明がされた．

（２）今後の授業評価の実施について

①部局の検討結果について

資料に基づき，第１回チーム会議において坂田副学長から各部局で検討していただきたいとの依頼がされた事項についての検討結果が示された．

坂田副学長より，①「アンケート調査を記名式にすること」および②「授業公開および授業参観を学期毎に一度は義務付けること」については，部局のコンセンサスが得られなかったため，見送らざるを得ないとの考えが示された．

次に，②「授業評価結果および自由記述意見欄を部局長が閲覧可とすること」について，教員評価とは別に，部局長が，何か問題があるのではないかと思われるような授業について学生の意見を把握しておくという狙いがあるとの説明がされた．

加藤久チームリーダーより，生物資源学部は，学部として採決したわけではないが，特に反対とする意見は出なかったとの報告がされた．

深沢准教授より，看護福祉学部では，「反対」となったことについて，「前回会議時では，教員評価に関わるという前提のような議論であった．教員評価とは別とするにしても，授業評価は，当初，教員自身のために実施するものとして始まったため，趣旨に反するという教授会での議論であった」との報告がされた．

坂田副学長より，教員評価の結果を給与等の処遇に反映するとの中期目標が決定し，中期計画案として，学内で委員会をつくり評価項目を検討するとなっているので，教員評価にどのような基準が使われるかについては，このチームが関与することではないが，今回の提案は，学生が何かを訴えていることを部局長に閲覧してもらい，学生の意見を吸い上げるように改善していきたい，これまでのように，教員の自主性に任せるという考えのもと，不満を抱いている学生の意見を放置し続けることはできないの考えが述べられた．

委員から，看護福祉学部のみ部局長が閲覧しないとすることはできないのかとの質問が出されたのに対し，坂田副学長より，教員に対する公平性を鑑みて，制度としては一斉に行うべきである，チーム会議で決めることができないようであれば，部局長が出席している教研審において審議したほうがよいかもしれないとの考えが示された．

また，部局長が閲覧できることになれば，閲覧した結果に対する部局長の方針については，今の段階では，部局長の判断に委ねるとの考えもあわせて示された．

清水准教授より，経済学部での議論において，「部局長の負担が増える」との意見があったため，資料に追加してほしいとの依頼がされた．あわせて，数値を永久に上げ続けるような議論をする必要はないのではないかとの意見があったとの報告がされた．

深沢准教授より，教員のコメントの中から，ある程度のことがわかるのではないかとの意見が出されたことに対し，坂田副学長から，教員全員がコメントを出していればよいが，必ずしも出されていないので，そこからすべて読み取ることはできないとの説明がされた．コメントについても，「コメントなし」とする教員もいるため，今後は，コメントにフォーマットを示してできるだけ詳しく，学生が納得できるような形にしていきたいとの説明がされた．

②通年の演習科目のアンケート実施について（経済学部）

清水准教授より，一昨年度，通年の演習科目については，アンケートの対象としないことが決められたことについて，演習は経済学部の重要科目であり，通年・半期を問わず授業評価の対象とするとの報告がされた．ただし，少人数の授業で匿名性が保てないような場合は，これまでどおり不実施とすることを認めていただきたいとの依頼がされた．

生物資源学部および海洋生物資源学部は，これまでどおり通年の演習科目をアンケートの対象外とすることがあわせて確認された．（看護福祉学部は，すでに実施済み．学術教養センターは，通年科目の演習なし）

③少人数によるアンケート不実施について

坂田副学長より，少人数の考え方を，アンケート実施時の出席者が５人以下と統一させていただきたいとの提案がされた．

これについて，アンケートの実施方法を協議した結果，以下のとおりとなった．

・受講登録者数が５名以下の授業についても，アンケートの実施を希望する場合があるので，アンケートの対象とすることとする．

・受講登録者が何名であっても，当日の出席者数が５名以下となりアンケートを実施しなかった場合は，不実施を認めるので，アンケート期間終了後，不実施報告書を提出してもらう．これまでのように，事前に不実施理由書を提出する必要はない．少人数以外の理由で不実施を希望する場合は，事前に相談することとする．

④オムニバス授業のアンケート実施について

深沢准教授より，オムニバス授業をアンケートの対象外とすることについて，看護福祉学部では，オムニバスで行う授業が多く，対象外とすることがなじまないとの意見が出されたことが報告されたが，坂田副学長より，対象外となっていても，希望すればアンケート実施が可能であることや，全学的にはオムニバス授業は様々な実施状況があるため，対象外とするとの説明がされた．

⑤学生と教員の話し合いの場について

坂田副学長より，年次計画において「講義について，学生と教員の話し合いの場を持つよう工夫する」との計画があったが，実施できなかったため，後期の授業の半分が終了する前に，20～30 分程度，学生との話し合いの場を設けてほしいとの依頼があった．

⑥平成 24 年度後期授業評価について

事務局より，例年どおり補講期間の 2 週間前（1 月 10 日～1 月 23 日）に実施を予定しており，事前に各教員あて依頼文を出す予定であるとの説明がされた．

（3）次期中期計画におけるＦＤ活動について

坂田副学長より，資料に基づき，中期計画におけるＦＤ活動において説明がされた．本資料は，10 月 9 日の教研審の資料からの抜粋であり，教研審において修正がされたが，修正後の案についてはまだ示されていないとの報告がされた．

２．平成２３年度業務実績報告書について

坂田副学長より，資料に基づき，県評価委員会からの指摘事項について説明がされた．

一つ目の，学生の授業理解については，先ほどのとおり，各部局で原因を究明し，改善策について議論していただきたいとの依頼がされた．

二つ目の「Ｆレックスに関わっている教員や学生の利用状況を調査するとともに，Ｆレックスの普及促進を図る」との対応について，坂田副学長から，山川教授に検討いただけないか依頼がされた．これに対して山川教授より，以下のとおり説明がされた．

- LMS については，以前，利用状況の調べ方を事務局に伝えてある．特に，情報関係の授業で使用するため，学生は全員が利用している．
- SNS の利用状況は，解析しなければわからない．
- 教育に関する指摘であり，LMS に特化して考えればよいのではないか．
- 普及促進について以前は，教員に対して講習会を開催していた．しかし，講習会に参加しても使わない教員が多く，必ず使わなければならないものではないので，その後，講習会は開催しないこととした．過去には，情報関係以外の教員の活用事例をＤＶＤで作成して全教員に配布したことはあるので，予算があれば，もう一度作成して普及促進を図ることは考えられる．

Ｆレックスについては，今後，坂田副学長が山川教授と相談して，どのようなことが可能であるか考えていきたいとの説明がされた．

３．Ｆレックス合宿研修会報告について

加藤久チームリーダーより，資料に基づき，Ｆレックス第３回ＦＤ合宿研修会について説明がされた．本学から８名の教員が出席し，うちチーム委員は４名が出席した．「ティーチングポートフォリオ」では，教員の教育改善のための振り返りの手法について説明があったが，本格的に行うと非常に労力が要るが，自分のできることから行っていくこともできるということがよくわかったとの報告がされた．また，「学習評価と質保証」では，看護福祉学部の寺島教授がディスカッションに参加していたが，非常に評判がよかったとの報告がされた．

引き続き山川教授より，「ティーチングポートフォリオ」については，Ｆレックスで３月１８～２０日に１回目のワークショップを開催する予定である旨，説明がされた．

４．学生意識調査アンケートの実施について

山川教授より，資料に基づき，学生意識調査アンケートの実施について説明がされた．記名式の実施については，教育企画推進委員会から各部局で議論していただいた結果，看護福祉学部においては無記名式，それ以外の学部においては記名式で実施する方向で考えているとの説明がされた．具体的な実施方法として，１年生は情報の必修授業があるので，

その中で実施するが，２～４年生については，実施していただく担当の先生と配布数を１０月末日までに事務局に伝えていただきたいとの依頼がされた．回収については，教員がアンケート用紙を集めてすみやかに事務局に提出することとし，遅くとも１２月上旬には提出することとした．

５．その他

① 次回チーム会議開催予定

加藤久チームリーダーより，第３回会議は３月中旬に開催予定，報告書の取りまとめに入る必要であるため，２月頃にチーム員に依頼をする予定であることが説明された．

■ 第３回会議録

日時　平成２５年３月１４日（水）９：００～１０：３０

場所　福井キャンパス管理棟特別会議室，小浜キャンパス TV 会議室

出席　坂田，清水，境（代理），加藤久，石川，加藤辰，水田，深沢，塚本，山川，亀田
事務局（白崎，江藤，遊津，村崎）

欠席　島田，事務局（大野）

１．前回会議課題について

議事録の確認とあわせ，前回の会議において課題となっていた内容理解が著しく低い授業に対する生物資源学部と海洋生物資源学部の対応策について，下記のとおり報告がされた．

・生物資源学部

１１月に教員懇談会を開催し，対応策を検討した．出席者からは，「多くの教員が授業改善を試みているにも関わらず，理解度が低下しているのは，学生の質の変化に教員側が対応しきれていないためかもしれない．」等の意見が出され，今後は，教員間で知恵を出し合いながら対応していきたいとの報告がされた．加藤久チームリーダーより，「内容理解度について，それほど極端に低下しているわけではないと思うが，今後も学生の理解度を確認しながらフォローしていきたいということになった．」との補足説明がされた．

・海洋生物資源学部

特に内容理解度が低い科目について，学部内カリキュラム委員会で協議を行い，来年度よりカリキュラム改正を行った．該当科目については，担当教員を替え，内容も見直すこととした．必修科目であることについては，変更しないこととした．抽象性の高い科目であり，学生がついてこられなかったのではないかと考えられる．見直しをしたことにより，しばらく状況を見ることとするとの報告がされた．

また，加藤久チームリーダーより，前回会議では，学生と教員の話し合いの場について，結果を報告するような形はとらなかったが，来年度以降のあり方について坂田副学長に確認した結果，「年度計画案が承認されれば，何らかの形で実施することとなる．具体的な方法については，教員に任せることになるかと思うが，結果の集約については，現段階で

は決まっていない.」と説明がされた.

２．２０１２年度ＦＤ事業報告について

①　授業評価結果について

事務局より資料に基づき，授業評価実施状況および結果が説明された.

坂田副学長より，参加科目数について，「参加科目数とは，授業評価を実施しなければならない科目の数なのか，それとも実施対象外も含めたすべての科目数なのか」との質問が出され，事務局より，実施しなければならない科目の数である旨，説明がされた．さらに，坂田副学長より，「学生が５人以下の場合は，対象外となっているため，参加科目数には入っていないのか」との質問に対し，事務局より，「前回会議において，５人以下の場合でも，授業評価を実施したいという教員もいるので，対象外とすることはしないこととなったため，参加科目数には入っている．しかし，５人以下の場合は，授業評価の不実施を申し出た場合は，認めるということになった」との説明がされた.

坂田副学長の「経済学部の場合，５人以下のため実施しなかった科目を除いた参加率は出ないのか」との質問に対し，出席者より，「その場合，もう少し詳細な資料が必要になる」との意見が出された.

これに対して坂田副学長より「不実施理由書を提出せずに授業評価を実施しなかったものについては，チームとしてきちんと把握しておく必要がある」との考えが述べられた.

次に，坂田副学長より，海洋生物資源学部の科目の内容理解度について，１０月に話し合いをしたにも関わらず，このように低下していることについて疑問が示されたことに対し，出席者より，「見直しを行うのは，来年度後期の授業からであり，結果はまだ出ていない.」との説明がされた．坂田副学長より，「外部評価委員から，昨年指摘したにも関わらず，変化がないではないかと指摘された場合，きちんと答えられなければならない．該当科目の担当教員は，どのように対処したのか」との質問に対し，出席者より，「何らかの工夫を行ったのだろうが，改善は見られなかった．学生の質の低下についても考えられるが，やはり抽象的な科目の理解度が低くなっている」と説明がされた.

次に，授業評価アンケートのコメント回答について，坂田副学長より「コメントなしという回答も，今後はなくしていきたい．学生が閲覧することを考え，教員がどう受け止めているかを明示していただきたい.」との考えが述べられた.

また，コメント回答について，出席者より次のような意見が述べられた.

・コメントの字数制限はあるのか.

→コメント依頼時に「２００～３００字程度」と目安を示しているが，それにとらわれるものではない.

・コメント回答の期間が短いのではないか.

→４月上旬にアンケートを返却し，コメントを依頼するが，４月下旬ぐらいまでの回答をお願いしたい.

・後期の授業評価結果について，４月に教員に返しても，学生の関心は，すでに次の学期に向いているので，学生がコメントを見ているかどうか疑問である.

→学生に対しては確かにそうかもしれないが，教員の振り返りやモチベーション維持のた

めに役に立っている.

坂田副学長より,「学生が利用するかどうかということもあるが，教員は，学生に対して最大限の情報提供を行うべきであり，コメントを返す必要がある.」との考えが述べられた．出席者より,「そのためには，もう少し工夫を行う必要があるのではないか.」との意見が出された．坂田副学長より,「授業評価のあり方を抜本的に見直す時期にきているかもしれない．中期計画においては，授業評価結果がきちんと利用されていくという姿勢で取り組んでいただきたいと思う.」との考えが述べられた.

また，出席者より,「授業評価実施の案内が，例年，遅い時期に来る．看護学科では，オムニバスで授業を行う場合も多い．例年，新年度第１回目のチーム会議において実施方法を決めるのだが，早く方針を決めていただけないか.」との依頼に対し，事務局より,「来年度の授業評価の実施方法について，この場で決めることができるのであれば，看護学科は早い時期に授業評価を実施できるのではないか.」との説明がされた．検討の結果，来年度授業評価については，今年度と同じ方法で実施することが確認された.

② 各部局のＦＤ活動について

資料に基づき，各学部より説明がされた.

経済学部

〇授業公開について

前期に２科目公開した．授業終了後，長時間，教員間で議論する時間を設けた.

〇学内研修について

演習Ⅰ・Ⅱの進め方について懇談会を実施し，当初は，演習という少人数教育の進め方について議論をしたのだが，最終的には，様々な困難を抱えている学生をどのように指導するかということが最大の議題となった.

→出席者より,「他大学では，そのような学生をサポートするため，学生に関する情報を書き込めるシステムを持っているところが多い．本学でもそろそろ，教員やキャリアセンターなどが情報を共有できるようなシステムが必要なのではないか」との意見が出された．坂田副学長より,「障害学生修学支援グループ会議において，大きな課題となっていることである．しかし，グループ会議では，支援を求める学生に対する支援は当然として，支援を求めていないが，支援が必要ではないかと思われる学生に対してどうするか，まだ決まっていない.」との説明がされた.

これに対して出席者より，下記のとおり意見が出された.

- そのような学生に対しても，情報を共有するために何らかの方策があったほうがよいのではないか.
- 経済学部では，現在，単位修得遅延学生について情報を集めているが，主に学生支援企画推進委員間で情報を共有する方向性が進みつつあるため，障害学生修学支援グループだけで何かをやろうとしてもうまくいかない．問題と思われる学生の中で，本当に障害を持つ学生がいれば，障害学生修学支援グループが支援し，障害ではないけれども，やる気を失っているような学生については，学生支援企画推進委員で支援するという横の連携を考える必要がある.

・　１年生は，初めに一般教育を履修するので，必修科目である授業の中で欠席が続く学生の情報などを担当教員に提供するのだが，教員によって対応に温度差がある．担当教員にメールを送ってまで連絡するほどのことでないような場合，情報を書き込めるようなシステムであれば，情報が集積されることにより，学生の状況がつかめるのではないか．

坂田副学長より，「経済学部では，クラス担任といっても，学生が面識もなく，相談しづらい状況である．担任制がもっと機能するようにしなければならない．」との意見が述べられた．

看護福祉学部

〇授業公開

資料記載の授業を随時公開したが，参観した教員はいなかった．

〇学内研修，学外研修

資料記載のとおり．

海洋生物資源学部

〇授業公開

日時を決めて公開し，できるだけ多くの教員に参観を呼びかけた．

生物資源学部，学術教養センター

〇授業公開

全講義を随時公開としたが，参観した教員はいなかった．

また，山川教授より，「来週，ティーチングポートフォリオ作成ワークショップを本学で開催するため，報告書資料に追加してほしい．」との依頼がされた．

③　決算報告について

事務局より，資料に基づき，ＦＤ予算の執行状況について説明がされた．昨年度は，障害学生修学支援グループ関係事業の予算が執行されたが，今年度はなかったことや，業務委託経費の仕様見直しによる経費節減等により，昨年度と比べ，２０万円以上少なくなっているとの説明がされた．あわせて，決算の関係上，執行漏れがないか各部局で周知していただきたいとの依頼がされた．

④　「ＦＤ報告書２０１２」の作成について

加藤久チームリーダーより，資料に示したような内容を，報告書で作成する必要があるので，Ｆレックスを通じて，４月１日（月）までに原稿をアップしてほしいとの依頼がされた．あわせて，４月半ばまでに原稿を取りまとめ，４月末に報告書を完成させる予定であるとスケジュールが示された．

３．学生意識調査アンケート結果について

資料に基づき，山川教授から説明がされた．１１月に各学部の協力を得てアンケートを実施した結果，１，２５１名の回答が集まり，昨年度に比べて５倍の回答数となった．これは，学生の７６％が回答したことになる．回答数が多かったため，昨年度より統計的にしっかりとしたデータになっている．本日の資料以外にも詳細なデータがＦレックスにアップしてあるので，参考にしてほしいとの説明がされた．

４　次回チーム会議開催予定

平成２５年度第１回会議開催時期については，新チームにおいて決定することとなった．

1.3　FD 事業経費

今年度は，障害学生修学支援グループによる予算執行がなかったこと等により，昨年度に比べ，全体として 281,911 円減少した．

平成24年度　FD事業経費（実績）

（単位：円）

費目	細目	実績
報償費		**59,600**
	FD研修 講師報酬（社会福祉学科開催）（7/26）	38,400
	FD研修 講師報酬（社会福祉学科開催）（10/17）	21,200
旅費		**291,326**
	FD研修 講師旅費（社会福祉学科開催）（7/26）	41,120
	FD研修 講師旅費（社会福祉学科開催）（10/17）	560
	FD研修（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	5,522
	FD研修（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	5,000
	FD研修（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	23,180
	FD研修（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	6,110
	FD研修（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	1,036
	FD研修（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	6,600
	FD研修（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	5,370
	FD研修（未来教育プロジェクト）（8/18）（参加費+旅費）	47,460
	FD研修（未来教育プロジェクト）（8/18）（参加費+旅費）	52,988
	FD研修（未来教育プロジェクト）（8/18）（参加費+旅費）	48,920
	FD研修（未来教育プロジェクト）（8/18）（参加費+旅費）	47,460
消耗品費		**26,013**
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	FD研修資料代（F-レックス合宿研修会）（9/3～4）	3,000
	参考図書（ハーバード白熱日本史教室）	2,013
委託料		**1,859,707**
	前期授業評価アンケート業務委託	850,500
	後期授業評価アンケート業務委託	819,000
	FD報告書2011　印刷	122,850
	「学生の意識調査アンケート」データ入力	67,357
使用料		**3,200**
	FD研修 講師タクシー代（社会福祉学科開催）（7/26）	3,200
合計		**2,239,846**

1.4　事業の実施状況

1.4.1　授業評価

実施概要，質問用紙と回答用紙，全体集計結果を 16 頁より順に掲載する．16 頁の実施概要を 2011 年度のそれと比較すると, 前期の学部の参加科目が 321 科目から 290 科目に減少（内訳は経済学部 2 科目減，生物資源学部 2 科目減，海洋資源学部 4 科目減，看護福祉学部 3 科目減，学術教養センター20 科目減，キャリア教育科目増減なし）し，後期は 307 科目から 289 科目に減少（内訳は経済学部 30 科目増, 生物資源学部 9 科目減, 海洋資源学部 8 科目減, 看護福祉学部 8 科目減，学術教養センター22 科目減，キャリア教育科目 1 科目減）した.

平成24年度前期　学生による授業評価の実施結果

★実施期間
平成24年7月9日（月）～7月20日（金）

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,139 枚	5,248 枚
生物資源学部	694 枚	895 枚
海洋生物資源学部	738 枚	1,071 枚
看護福祉学部	1,259 枚	1,569 枚
学術教養センター	4,280 枚	7,649 枚
キャリアセンター	34 枚	59 枚
計	9,144 枚	16,491 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	50 枚	70 枚
生物資源学研究科	23 枚	78 枚
看護福祉学研究科	16 枚	19 枚
計	89 枚	167 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	26 人	92.9%
生物資源学部	15 人	93.8%
海洋生物資源学部	13 人	86.7%
看護福祉学部	28 人	100.0%
学術教養センター	23 人	92.0%
キャリアセンター	1 人	100.0%
非常勤講師	44 人	81.5%
計	150 人	89.8%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	7 人	87.5%
生物資源学研究科	3 人	42.9%
看護福祉学研究科	8 人	88.9%
非常勤講師	4 人	100.0%
計	22 人	78.6%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	50 科目	82.0%
生物資源学部	20 科目	100.0%
海洋生物資源学部	21 科目	91.3%
看護福祉学部	46 科目	95.8%
学術教養センター	152 科目	83.1%
キャリア教育科目	1 科目	100.0%
計	290 科目	86.3%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	10 科目	76.9%
生物資源学研究科	4 科目	50.0%
看護福祉学研究科	8 科目	88.9%
計	22 科目	73.3%

平成24年度後期　学生による授業評価の実施結果

★実施期間
平成25年1月10日（木）～1月23日（水）

★調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	1,791 枚	5,167 枚
生物資源学部	298 枚	598 枚
海洋生物資源学部	448 枚	711 枚
看護福祉学部	1,237 枚	1,404 枚
学術教養センター	3,222 枚	6,497 枚
計	6,996 枚	14,377 枚

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	34 枚	69 枚
生物資源学研究科	15 枚	19 枚
看護福祉学研究科	11 枚	13 枚
計	60 枚	101 枚

★参加教員

＜学部＞		
経済学部	29 人	85.3%
生物資源学部	10 人	76.9%
海洋生物資源学部	17 人	100.0%
看護福祉学部	26 人	100.0%
学術教養センター	23 人	92.0%
キャリアセンター	1 人	100.0%
非常勤講師	33 人	84.6%
計	139 人	89.7%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	9 人	52.9%
生物資源学研究科	2 人	100.0%
看護福祉学研究科	4 人	66.7%
非常勤講師	1 人	33.3%
計	16 人	57.1%

★参加科目

＜学部＞		
経済学部	80 科目	71.4%
生物資源学部	13 科目	76.5%
海洋生物資源学部	18 科目	94.7%
看護福祉学部	41 科目	95.3%
学術教養センター	137 科目	84.0%
計	289 科目	81.6%

＜大学院＞		
経済・経営学研究科	12 科目	52.2%
生物資源学研究科	2 科目	100.0%
看護福祉学研究科	4 科目	66.7%
計	18 科目	58.1%

福井県立大学
授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

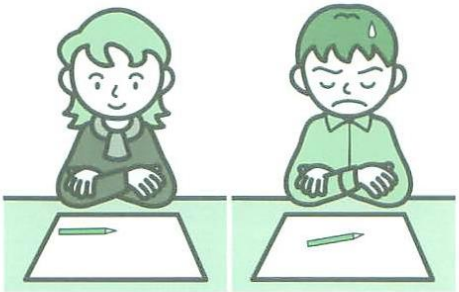
回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述してください。

記入上の注意

1：選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述してください。
2：記入は濃い(B 程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
3：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
4：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例） 良い例 ②…▶● 悪い例 ②…▶



本アンケートによる（全学、学部別等）授業評価結果は、本学ホームページ上で今学期末に開示予定です。
過去の集計結果は http://www.s.fpu.ac.jp/FD/lecinq.html をご覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

⓪ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨　例）平成21年4月入学生・・・⓪

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

⓪ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨　例）平成21年4月入学生・・・⑨

学部生 所属の番号をマークしてください。

1：経済学部経済学科　2：経済学部経営学科　3：生物資源学部生物資源学科　4：海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5：看護福祉学部看護学科　6：看護福祉学部社会福祉学科　7：科目等履修生・聴講生

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8：経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻　9：経済・経営学研究科 経営学専攻　10：生物資源学研究科 生物資源学専攻
11：海洋生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻　12：看護福祉学研究科 看護学専攻　13：看護福祉学研究科 社会福祉学専攻　14：科目等履修生・聴講生

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭

質問および回答欄

Q1 この授業（課題、レポート、予習復習を含む）に意欲的に取り組みましたか？
①意欲的に取り組まなかった　②あまり意欲的に取り組まなかった　③ある程度意欲的に取り組んだ　④意欲的に取り組んだ

① ② ③ ④

Q2 先生の講義の方法（話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用）はどうでしたか？
①不適切　②やや不適切　③まずまず適切　④適切

① ② ③ ④

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか？
①理解できなかった　②あまり理解できなかった　③ある程度理解できた　④理解できた

① ② ③ ④

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか？
①高まらなかった　②あまり高まらなかった　③少し高まった　④高まった

① ② ③ ④

Q5 この授業を総合的に評価してください。
①良くない　②あまり良くない　③まずまず良い　④良い

① ② ③ ④

Q6 授業を受けた上での感想（先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、教室環境など）を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。

Q6の自由記述欄

Q7 教員設定の質問（別紙参照）

① ② ③ ④

Q8 教員設定の質問（別紙参照）

Q8の自由記述欄

ご協力ありがとうございました

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期），大学院（前期・後期）の順に掲載する．以下に，集計結果の見方を記す．

全集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応 設問のキーワードを記すが，詳細は 18 頁を参照
数値上段	平均値（質問は，4 件法）
数値下段	母標準偏差．数値が大きい場合，平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが，良い評価と悪い評価が２分されている場合もあるので要注意．
集計方法	設問は，回答選択肢「１，２，３，４」をそれぞれ「1 点，2 点，3 点，4 点」と得点化，設問に対して無回答の場合は得点化せず，かつ有効回答数としては計上していない．この得点化規則に則り，設問別，集計グループ別に合計得点を求めて，有効回答数で割った平均値を上段に，母標準偏差を下段に示す．無回答の場合の人数は母集団に含めず．「—」の欄は有効回答が無かったことを示す．

〔集計グループ〕

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え，学生の入学年次（西暦年の下２桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

全体集計結果（学部・前期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（8269）	**3.16** **0.72**	**3.26** **0.72**	**3.07** **0.73**	**3.13** **0.79**	**3.28** **0.70**
学部学科別（8269）					
経済学部（3884）	3.14 0.73	3.28 0.73	3.06 0.75	3.10 0.80	3.28 0.71
経済学科（2009）	3.14 0.75	3.27 0.76	3.04 0.78	3.06 0.83	3.26 0.73
経営学科（1875）	3.14 0.71	3.28 0.71	3.08 0.71	3.15 0.76	3.31 0.68
生物資源学部（1105）	3.12 0.71	3.20 0.72	3.01 0.70	3.08 0.77	3.23 0.68
生物資源学科（1105）	3.12 0.71	3.20 0.72	3.01 0.70	3.08 0.77	3.23 0.68
海洋生物資源学部（1263）	3.11 0.72	3.18 0.71	3.01 0.73	3.07 0.79	3.19 0.68
海洋生物資源学科（1263）	3.11 0.72	3.18 0.71	3.01 0.73	3.07 0.79	3.19 0.68
看護福祉学部（2010）	3.26 0.68	3.29 0.71	3.14 0.69	3.25 0.77	3.35 0.69
看護学科（1271）	3.33 0.65	3.29 0.71	3.21 0.66	3.29 0.75	3.35 0.69
社会福祉学科（ 739）	3.14 0.70	3.31 0.71	3.03 0.71	3.17 0.80	3.33 0.71
科目等履修生・聴講生（ 7）	3.29 1.03	3.57 1.05	3.14 0.99	3.43 1.05	3.57 1.05
入学年次別（8269）					
05生（ 4）	2.75 0.43	3.50 0.50	3.75 0.43	4.00 0.00	3.50 0.50
06生（ 6）	3.17 0.90	3.50 0.50	3.00 0.82	3.67 0.47	3.67 0.47
07生（ 19）	2.74 1.07	3.32 0.73	2.89 0.91	3.05 0.94	3.37 0.81
08生（ 46）	3.22 0.69	3.26 0.85	3.17 0.67	3.24 0.89	3.26 0.82
09生（ 460）	3.39 0.66	3.40 0.67	3.29 0.66	3.35 0.73	3.41 0.65
10生（1286）	3.15 0.67	3.19 0.74	3.05 0.70	3.13 0.77	3.25 0.71
11生（2452）	3.17 0.69	3.27 0.70	3.10 0.69	3.17 0.75	3.29 0.67
12生（3996）	3.14 0.74	3.26 0.74	3.02 0.76	3.07 0.82	3.26 0.72
部局別（8269）					
経済学部（1896）	3.13 0.73	3.22 0.76	3.02 0.77	3.09 0.81	3.24 0.73
生物資源学部（ 590）	3.01 0.65	3.14 0.71	2.93 0.67	3.06 0.75	3.20 0.66
海洋生物資源学部（ 682）	3.05 0.68	3.09 0.69	2.96 0.70	3.00 0.77	3.10 0.64
看護福祉学部（1147）	3.31 0.65	3.32 0.69	3.20 0.64	3.35 0.71	3.39 0.66
学術教養センター（3954）	3.17 0.74	3.30 0.72	3.08 0.74	3.11 0.80	3.31 0.71
規模別（8269）					
100人以上（3687）	3.08 0.74	3.20 0.74	2.99 0.74	3.06 0.81	3.22 0.72
100人未満（4582）	3.23 0.69	3.30 0.71	3.13 0.71	3.18 0.77	3.32 0.68

全体集計結果（学部・後期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 6,793 ）	**3.21**	**3.34**	**3.12**	**3.22**	**3.38**
		0.71	**0.69**	**0.72**	**0.76**	**0.67**
学部学科別	（ 6,793 ）					
経済学部	（ 3,480 ）	3.19	3.34	3.11	3.21	3.38
		0.73	0.70	0.73	0.76	0.67
経済学科	（ 1,757 ）	3.20	3.35	3.11	3.20	3.39
		0.75	0.70	0.77	0.80	0.68
経営学科	（ 1,723 ）	3.18	3.34	3.12	3.21	3.38
		0.71	0.69	0.70	0.72	0.66
生物資源学部	（ 693 ）	3.18	3.33	3.07	3.18	3.37
		0.67	0.63	0.66	0.76	0.63
生物資源学科	（ 693 ）	3.18	3.33	3.07	3.18	3.37
		0.67	0.63	0.66	0.76	0.63
海洋生物資源学部	（ 835 ）	3.09	3.16	2.94	3.04	3.22
		0.73	0.71	0.74	0.84	0.70
海洋生物資源学科	（ 835 ）	3.09	3.16	2.94	3.04	3.22
		0.73	0.71	0.74	0.84	0.70
看護福祉学部	（ 1,777 ）	3.31	3.43	3.23	3.34	3.44
		0.66	0.65	0.67	0.70	0.64
看護学科	（ 1,173 ）	3.37	3.41	3.26	3.34	3.42
		0.65	0.68	0.67	0.72	0.67
社会福祉学科	（ 604 ）	3.20	3.46	3.17	3.33	3.48
		0.66	0.60	0.67	0.67	0.59
科目等履修生・聴講生	（ 8 ）	2.50	2.88	2.63	2.75	2.88
		1.50	1.45	1.41	1.39	1.45
入学年次別	（ 6,793 ）					
05生	（ 1 ）	3.00	3.00	3.00	3.00	3.00
		0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
06生	（ 9 ）	2.89	3.00	2.56	3.00	2.89
		0.87	0.94	0.96	1.15	1.20
07生	（ 7 ）	2.86	3.71	3.29	3.14	3.57
		1.25	0.45	0.70	1.12	0.49
08生	（ 41 ）	3.46	3.66	3.34	3.73	3.76
		0.67	0.72	0.68	0.70	0.58
09生	（ 389 ）	3.34	3.49	3.27	3.35	3.47
		0.74	0.69	0.74	0.82	0.73
10生	（ 808 ）	3.28	3.37	3.20	3.31	3.43
		0.70	0.70	0.68	0.76	0.65
11生	（ 2,177 ）	3.14	3.27	3.04	3.15	3.30
		0.66	0.67	0.69	0.74	0.65
12生	（ 3,361 ）	3.21	3.36	3.12	3.22	3.40
		0.74	0.68	0.73	0.77	0.67
部局別	（ 6,793 ）					
経済学部	（ 1,726 ）	3.20	3.31	3.08	3.19	3.35
		0.72	0.72	0.74	0.77	0.69
生物資源学部	（ 287 ）	3.12	3.30	3.01	3.16	3.31
		0.60	0.64	0.62	0.75	0.67
海洋生物資源学部	（ 437 ）	2.97	3.07	2.81	2.92	3.14
		0.70	0.71	0.72	0.86	0.66
看護福祉学部	（ 1,207 ）	3.30	3.40	3.18	3.32	3.40
		0.65	0.67	0.67	0.71	0.66
学術教養センター	（ 3,136 ）	3.22	3.38	3.16	3.24	3.42
		0.73	0.66	0.71	0.76	0.65
規模別	（ 6,793 ）					
100人以上	（ 1,959 ）	3.13	3.35	3.09	3.19	3.35
		0.71	0.66	0.69	0.75	0.65
100人未満	（ 4,834 ）	3.24	3.34	3.13	3.23	3.39
		0.71	0.69	0.73	0.77	0.67

全体集計結果（大学院・前期）

集計グループ（集計数）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体（ 83）	3.49 0.67	3.55 0.68	3.28 0.70	3.61 0.66	3.73 0.52
研究科専攻別（ 83）					
経済・経営学研究科（ 47）	3.62 0.64	3.62 0.70	3.49 0.71	3.53 0.74	3.79 0.50
地域・国際経済政策専攻（ 6）	3.00 1.00	3.50 0.50	3.33 0.75	3.17 1.07	3.67 0.47
経営学専攻（ 41）	3.71 0.51	3.63 0.72	3.51 0.70	3.59 0.66	3.80 0.50
生物資源学研究科（ 12）	3.50 0.65	3.75 0.43	3.00 0.41	3.75 0.60	3.75 0.43
生物資源学専攻（ 12）	3.50 0.65	3.75 0.43	3.00 0.41	3.75 0.60	3.75 0.43
生物資源学研究科（ 10）	3.10 0.30	2.90 0.70	2.60 0.66	3.40 0.49	3.20 0.60
海洋生物資源学専攻（ 10）	3.10 0.30	2.90 0.70	2.60 0.66	3.40 0.49	3.20 0.60
看護福祉学研究科（ 14）	3.36 0.81	3.64 0.48	3.29 0.45	3.93 0.26	3.93 0.26
看護学専攻（ 5）	3.40 0.49	3.80 0.40	3.20 0.40	3.80 0.40	4.00 0.00
社会福祉学専攻（ 9）	3.33 0.94	3.56 0.50	3.33 0.47	4.00 0.00	3.89 0.31
科目等履修生・聴講生（ 0）	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別（ 83）					
05生（ 0）	— —	— —	— —	— —	— —
06生（ 0）	— —	— —	— —	— —	— —
07生（ 0）	— —	— —	— —	— —	— —
08生（ 0）	— —	— —	— —	— —	— —
09生（ 0）	— —	— —	— —	— —	— —
10生（ 4）	3.75 0.43	3.75 0.43	3.00 0.71	3.25 0.43	3.50 0.50
11生（ 22）	3.55 0.58	3.36 0.83	3.36 0.64	3.64 0.71	3.68 0.47
12生（ 57）	3.46 0.70	3.61 0.61	3.26 0.71	3.63 0.64	3.77 0.53
部局別（ 83）					
経済・経営学研究科（ 47）	3.62 0.64	3.62 0.70	3.49 0.71	3.53 0.74	3.79 0.50
生物資源学研究科（ 22）	3.32 0.55	3.36 0.71	2.82 0.57	3.59 0.58	3.50 0.58
看護福祉学研究科（ 14）	3.36 0.81	3.64 0.48	3.29 0.45	3.93 0.26	3.93 0.26

全体集計結果（大学院・後期）

集計グループ	（ 集計数 ）	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	（ 55 ）	3.73 0.55	3.82 0.39	3.69 0.46	3.85 0.35	3.89 0.31
研究科専攻別	（ 55 ）					
経済・経営学研究科	（ 33 ）	3.85 0.36	3.91 0.29	3.76 0.43	3.91 0.29	3.88 0.33
地域・国際経済政策専攻	（ 9 ）	4.00 0.00	3.89 0.31	3.89 0.31	4.00 0.00	3.89 0.31
経営学専攻	（ 24 ）	3.79 0.41	3.92 0.28	3.71 0.45	3.88 0.33	3.88 0.33
生物資源学研究科	（ 14 ）	3.57 0.49	3.57 0.49	3.50 0.50	3.71 0.45	3.86 0.35
生物資源学専攻	（ 14 ）	3.57 0.49	3.57 0.49	3.50 0.50	3.71 0.45	3.86 0.35
生物資源学研究科	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
海洋生物資源学専攻	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
看護福祉学研究科	（ 8 ）	3.50 1.00	3.88 0.33	3.75 0.43	3.88 0.33	4.00 0.00
看護学専攻	（ 1 ）	4.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
社会福祉学専攻	（ 7 ）	3.43 1.05	3.86 0.35	3.86 0.35	3.86 0.35	4.00 0.00
科目等履修生・聴講生	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
入学年次別	（ 55 ）					
05生	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
06生	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
07生	（ 1 ）	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
08生	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
09生	（ 3 ）	4.00 0.00	4.00 0.00	3.33 0.47	4.00 0.00	4.00 0.00
10生	（ 0 ）	— —	— —	— —	— —	— —
11生	（ 10 ）	3.70 0.46	3.60 0.49	3.50 0.50	3.80 0.40	3.70 0.46
12生	（ 41 ）	3.71 0.59	3.85 0.35	3.76 0.43	3.85 0.35	3.93 0.26
部局別	（ 55 ）					
経済・経営学研究科	（ 33 ）	3.85 0.36	3.91 0.29	3.76 0.43	3.91 0.29	3.88 0.33
生物資源学研究科	（ 14 ）	3.57 0.49	3.57 0.49	3.50 0.50	3.71 0.45	3.86 0.35
看護福祉学研究科	（ 8 ）	3.50 1.00	3.88 0.33	3.75 0.43	3.88 0.33	4.00 0.00

1.4.2　授業公開

全部局の実績一覧を以下に示す．その詳細は 2 章「各部局の FD 活動」にて報告する．

2012 年度授業公開一覧

学期	部局	授業名	担当	公開期間	参観数
前期	経済学部	経営情報処理Ⅱ	西崎雅仁 教授	7 月 11 日	3 名
		開発経済論	坂田幹男 教授	7 月 12 日	6 名
	看護福祉学部	解剖生理学Ⅰ	本田和正 教授	随時	0 名
		臨床栄養学	平井一芳 講師	随時	0 名
		産業看護論	平井一芳 講師	随時	0 名
		基礎看護技術Ⅰ	笠井恭子 准教授	随時	0 名
		基礎看護技術Ⅲ	笠井恭子 准教授	随時	0 名
		地域看護学概論	中谷芳美 教授	随時	0 名
		地域看護活動技術論	中谷芳美 教授	随時	0 名
		看護管理学	交野好子 教授	随時	0 名
		看護研究方法論	交野好子 教授	随時	0 名
		精神医学Ⅰ	大森晶夫 教授	随時	0 名
		ソーシャルワーク実習	舟木紳介 講師	随時	0 名
		社会学概論	塚本利幸 准教授	随時	0 名
後期	海洋生物資源学部	地域活性化演習 A	長谷川健二 教授ほか	10 月 7 日	10 名
	看護福祉学部	解剖生理学Ⅱ	本田和正 教授	随時	0 名
		基礎保健学	平井一芳 講師	随時	0 名
		公衆衛生・環境医学	平井一芳 講師	随時	0 名
		看護学原論Ⅱ	高鳥眞理子 教授	随時	0 名
		基礎看護技術Ⅱ	笠井恭子 准教授	随時	0 名
		成人急性看護学	高原美樹子 教授 山崎加代子 講師	随時	0 名
		地域看護活動展開論	中谷芳美 教授	随時	0 名
		精神医学Ⅱ	大森晶夫 教授	随時	0 名
		ソーシャルワーク論Ⅳ	吉弘淳一 准教授 日根野建 准教授	随時	0 名
		地域看護活動展開論	塚本利幸 准教授	随時	0 名

※生物資源学部および学術教養センターでは全講義を随時公開としたが，参観した教員はいなかった．

1.4.3　FD 研修

学内研修および学外の研修実績を一覧にして示す．それぞれの詳細は 2 章「各部局の FD 活動」にて報告する．

2012 年度 学内研修一覧

テーマ	講師等	開催形式	開催日	参加数
演習懇談会 （テーマ：演習Ⅰ・Ⅱの進め方）	経済学部教員	懇談会	2 月 20 日	12 名
ソーシャルワーク実習教育 －現場と大学を繋ぐスーパービジョンのあり方－	東京国際大学 人間社会学部 准教授　村井　美紀	講演会	7 月 26 日	26 名
原発事故広域避難者の生活・医療・福祉ニーズ	FFF の会代表 川崎　葉子	講演会	10 月 17 日	14 名
ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ	大阪府立大学高等専門学校　北野健一 福井大学　本田知己 仁愛女子短期大学 田中洋一 福井工業大学 杉原一臣 福井県立大学　山川修 木更津高等専門学校 山下哲	ワークショップ	3 月 18 日 ～20 日	5 名

2012 年度 学外研修一覧

参加イベント	主催者	日程	出張先	参加者
意志ある学び －未来教育プロジェクト２０１２－	シンクタンク 未来教育ビジョン	8 月 18 日	ワークピア横浜	看護福祉学部 吉村　洋子　教授 笠井　恭子　准教授 深沢　裕子　准教授 月僧　厚子　講師

Ｆレックス第３回 ＦＤ合宿研修会	Ｆレックス	9月3日 ～ 9月4日	仁愛女子短期大学	生物資源学部 　加藤　久晴　准教授 　高橋　正和　准教授 海洋生物資源学部 　加藤　辰夫　教授 看護福祉学部 　寺島　喜代子　教授 　有田　広美　准教授 　深沢　裕子　准教授 学術教養センター 　山川　修　教授 キャリアセンター 　中里　弘穂　准教授

2.　各部局の FD 活動

FD 活動は 2008 年後期より部局主体で企画実施するようになった．それは，部局によって FD の意義が異なり, またその理解や普及の度合いも異なることが明らかになった為である．以下に，各部局の活動成果を部局担当者がまとめた．

2.1 経済学部（福山龍，清水葉子，学部内 FD 委員：境宏恵）

経済学部の本年度の FD 活動は，①「授業評価」（前期・後期），②「授業公開」（2 件，今年度は前期実施）を行った．加えて，③少人数の専門教育を行う「演習 I」,「演習 II」に関する担当者懇談会を開催した（後期）．教授会等で折に触れて FD 活動に関する議論を行っている他，日常業務の中でも，授業方法や学生の理解度などに関して意見交換を行っている．

2.1.1 授業評価アンケート

（１）演習 I，演習 II について授業評価アンケートを再開

●授業評価では, 3, 4 年生向けに開講される少人数専門教育である演習 I, 演習 II について，昨年度は授業評価の実施対象から外されることとなったが，今年度から実施対象に入れ直した．

●学生の履修人数が少ない場合に，授業評価アンケートの回答者が特定されてしまうおそれがあるが，経済学部の重要科目であることから実施が適当と判断した．

●履修人数が少ない場合には，登録学生数または当日の参加学生数が 5 人以下の場合には不実施を選ぶことができるほか，5 人を超えていても不実施の理由を提示すれば不実施を可能にするという対応をとった．

（２）授業評価アンケートの結果について

●ここ 5 年程度，前期・後期を総合して，学生の「意欲」,「授業方法」,「理解度」,「関心」,「総合評価」の 5 つの評価項目について，評価はおおむね上昇してきている項目が多いが，評価が上下し一定しないものもある．

●全体的には，前期開講科目より後期開講科目の方が評価が高い傾向にある．理由ははっきりしないが，後期の方が開講科目数が少ないこと，前期で講義 I を開講し，後期で同じ講義の II を開講するというように内容に連続性のある科目の場合，前期で学んだ内容に関心を持って後期の II を履修している場合があることなどが考えられる．

●前期開講科目については，昨年よりすべての項目で評価があがった．とりわけ，学生の理解度と授業方法の評価が大きく上がり，学生の関心・意欲の面でも評価は上昇している．学生の関心は緩やかに低下していた時期があったことから，学生の関心が戻ったことは良いことである．

●後期開講科目についても，1 項目で横ばいになった他は，すべての項目で評価が上昇して

いた．横ばいになった項目は「授業方法」でああるが，この項目は過去最高値に達しているので，評価が飽和したとも考えられる．残る「授業方法」「関心」「理解度」については上昇した．

●全学部に共通するが，前期・後期ともに，学生の理解度が他の評価項目に比べて低い傾向があるので，理解度を高める工夫は必要である．

●全体として，経済学部としては，授業評価アンケート実施による学部全体としての成果は十分達成できたと考えている．

●教員の授業評価アンケートへのコメント割合も，年々増える傾向にあるが，さらに増加することを期待したい．

●今後は，理論系・政策系・実践系などの科目特性や，大教室授業・少人数授業など授業の態様に応じて細かい分析をすることで，学生が関心を持てる授業を実施していくことを検討したい．

●授業評価アンケートは，限られた質問肢で学生の評価をきくものであり，これをもって授業を総合的に評価することには限界がある．授業改善は，授業評価アンケートの数字を上げることだけにとらわれるべきではない．学生の自主学習を促進することや，プレゼンテーションやフィールドワークなど，座学以外の取り組み機会を増やすこと，学生同士の議論の機会を増やすことなど，多様な授業改善に注力すべきである．

2.1.2　授業公開

授業名：経営情報処理 II

日時：2012 年 7 月 11 日（水）3 限，検討内容はメールで提出.

担当教員：西崎雅仁教授

受講者数：25 名

参加教員：福山龍准教授，境宏恵准教授，清水准教授

概要

　コンピューター教室を使って，学生一人に一台のパーソナル・コンピューターが割り当てられている環境で授業が行われている．株価の実際のデータを使って，移動平均や線形回帰分析を行い，結果をグラフにして可視化することで理解を高める．今回公開された授業は，同じテーマで行われている連続授業の 3 回目であった．授業のスタイルとしては，学生が各自で行う分析作業が中心で，学生はすでに前 2 回の授業で分析方法を身につけている．学生によって，進度が違ったり，疑問点が出てきたりするので，1 年上の学生が 2 名，TA（ティーチング・アシスタント）として授業補助を行っており，進度の遅い学生の手助けや，質問への回答等を行っている．授業の最後には，株価分析に添えて，各自の分析結果を 3 点記入して，結果とともに提出する．

ディスカッション（順不同）

●学生は自分の選んだ企業の株価データを用いるので，同じ手法で分析をしていても学生が得る結果はそれぞれ異なっている．隣の友人と比べ合ったりして関心を持ちやすく，参加意識も高いように見受けた．

●実際のデータを用いた分析であるので，リアルで実践的．

●前年度に理解度の高かった学生を TA（ティーチング・アシスタント）として教育補助業務をさせている．学生は，分からない点があっても TA には質問しやすいので，気軽に聞いて疑問点を解消している．また，TA にとっても，後輩を教えることは励みになると思う．

●分析結果を各自で考えさせて提出を求めることで，単なるデータ加工に終わらず，理解度が高まることが期待できる．

●学生の作業量が多いので，授業 1 回あたりの達成感も高そうである．

●途中でついていけなくなって脱落する学生はいないのか？

授業名：開発経済論

日時：2012 年 7 月 12 日（木）2 限，検討会 12:00-13:10

担当者：坂田幹男教授

受講者数：約 60 名

参加教員：徳前元信教授，木野龍太郎准教授，境宏恵准教授，清水葉子准教授，新宮晋准教授，廣瀬弘毅准教授

概要

前回の講義で学生から寄せられた質問に対して教員が答えることから講義がスタートした．本講義では，冒頭に開発独裁，輸出志向の工業化，不均衡成長戦略など東アジアの経済成長モデルが概説され，続いて韓国のケースに焦点を当てて，戦後の韓国の経済成長と，当時の時代背景・指導者の考え方など幅広く論じられた．また，通説に対して講義者自身の自説も明快に述べられ，迫力のある講義であった．授業スタイルは，キーワードの板書やテキストの参照などを交えつつ，教員による口頭での説明が中心である．板書をあえて丁寧にしない方針であるとのこと．また，受講生の一人に質問を投げかけるなど，学生が考える機会が作られていた．

検討会におけるディスカッションの主な内容

- 前回の講義で学生が提出した感想や質問に回答するというのは学生の参加意識が高まるのでとてもよいと感じた．
- 内容が豊富で多くの事実関係に裏付けられており，とても迫力のある講義だったが，一方で，学生にとっては講義 1 回あたりの情報量が多いかもしれない．

- 事例が多く表現も多彩だが，それゆえに全体の見取り図があった方がおもしろいのではないか．また，キーワード，年表など，基本資料だけでも提示するとよいのではないか．
- 説明の中に出てくる言葉（固有名詞，歴史的事象，専門用語など）が，学生にとっては難しかったりイメージを浮かべるのが困難であったりするところがあるのではないか．また，今日の授業で対象となっていた時代の歴史は若い学生にとっては過去の遠い出来事と感じるかもしれず，教員と学生との間で時代感や現実感にズレがある．外国の歴史ということもあり，学生にはピンと来ていない可能性がある．
- 単に知識を伝えるだけの講義ではなく，教員自身の自説が明確に述べられていて，これぞ大学の講義と思えるような内容だった．
- （担当者より，早口なのでゆっくり話してほしいという意見が学生から寄せられるとの説明を受けて）講義の中で板書をすると，書く作業に時間を取られるので講義のスピードが落ちることで学生が理解しやすくなることもある．板書のこの効果を評価してもよいのではないか．

2.1.3　演習Ⅰ・Ⅱ担当者懇談会

経済学部では，学部専門科目としてゼミナール形式の演習Ⅰ（3 年次配当，通年科目，4 単位）および演習Ⅱ（4 年次配当，通年科目，4 単位）を開講している．いずれも必修科目として位置づけられ，経済学部の専門教育における要ともいうべき科目である．

演習ⅠおよびⅡを担当しているのは基本的に学部の全教員であり，一部の学生を除いてほとんどの学生が受講している．よって，1 演習あたりの受講生数は平均すると約 7 名という少人数教育が行われており，教員は日頃から学生の相談に応じたり課外活動を支援したりするなど，学生と教員との間に信頼関係が築かれている．そこで，学生の休退学に際して面談を行ったり，単位取得遅延学生等にアドバイスを行ったりするなど，大学での学びを継続していくことに困難が生じている学生への支援を演習の担当教員が行うことも多い．

このような状況ゆえか，本懇談会の議論は，障害を持つ学生や単位取得が遅れている学生など支援が必要な学生にいかに対応するかという問題が中心となり，この点について意見の交換や問題意識の共有を行った．

日時：2013 年 2 月 20 日（水）13:30-14:30
場所：経済学部教授会室
参加教員：両学科から 12 名
懇談会での議論の概要

- 学習障害等の事情のある学生や単位取得が遅れて卒業が困難である学生に対して，演習の担当教員の支援や見守りと，キャリアセンター等の学内組織からの働きかけとの間に方向性のズレが生じて学生に混乱を生じていることがある．
- メンタル面で不安を抱える学生に対して，大学が組織的に対応できていない．学部と，保健管理センター，キャリアセンターとの連携もうまくいっていない事例がある．問題

を抱えた学生への初期対応は教員がせざるを得ないが，それをどこに相談したらよいのかわからない．また，障害学生学修支援委員などの特定の個人に依存した対応ではなく，組織として対応できるようにしていくべきである．組織的対応が不十分な現状では，委員が固定化されがちである．

- 保健管理センターの担当者が短期間で交代すると学生に不利益がある．支援を受ける学生からすると，担当者が頻繁に交代することは望ましくない．保健管理センターの事務負担の軽減等により，学生のケアに集中できる環境を作ることも必要である．
- 障害を抱えている学生に対して，教員は障害に関する専門知識がないので対応は無理である．無理どころか，対応を誤ると万が一の事態をも引き起こしかねないというリスクがあることを考えると，医師等の外部の専門家と連携し，大学としての組織的対応が必要である．
- 不安を抱える学生の受け入れという点で，これまでは教員個人の努力や教員間での協力によってやってきたが，教員の負担が重くなると教員が問題を抱える学生の受け入れ（研究室やゼミへの受け入れ）自体に難色を示すという事態を招きかねない．そのような事態を起こさないようにするためにも，組織的な対応が必要である．
- 演習を履修していない学生や留年生，単位取得遅延者の中に，メンタル面での問題を抱えているケースや学習障害を抱えているケースも多い．また，日頃の勉強では問題や症状が顕在化しなくても就職活動の中で顕在化するケースもあり，キャリアセンターも重要である．
- 学生本人だけではなく，家庭との連携も重要である．演習・講義等で問題を抱えていると思われる学生を発見した際には，ケースに応じて委員や保健管理センター，医療機関や家庭との連携が必要である．

2.2　生物資源学部（加藤久晴・石川敦司）

生物資源学部の本年度の FD 活動は，授業評価および前期・後期終了後における，各教員による授業運営上の工夫等のとりまとめ，およびその配布である．以下，順に述べる．

2.2.1　授業評価

本年度の授業評価の結果，前期において「内容」を除くすべての項目において低下傾向が認められた．「内容」とは講義内容の理解を反映するものであるが，低下はしていないものの全学部の中で一番低いという結果となっている．「意欲的」も全学部内で最も低い．これらのことが第 2 回の会議において指摘され，その原因・対策等について生物資源学部において話し合うこととなった．なお，後期については減少傾向にある項目がいくつか見受けられるが，全体としては安定した値に落ち着いていると見ることができる．

【懇談会】
「生物資源学部の授業評価における内容理解の低下について」
日時・場所：平成 24 年 11 月 20 日（火）17:00～17:30 生物資源学棟 1F　会議室
参加者：生物資源学部教員（20 名）

懇談会において，以下のような意見があった．
・講義内容は前年と大きく変わっているわけではなく，むしろ毎年改善を試みている．それにも関わらず理解度が低下しているのは，学生の質が変わっていると言わざるを得ない．
・学生の質のレベルの低下がハッキリ感じられる．語学などの試験結果が他学部より悪い．文章を書けない学生も増えている．
・できる学生とできない学生が 2 極化している感がある．できない学生に講義内容・レベルを合わせることはできない．
・講義内容を以前の三分の二程度まで減らしている．それに応じて，試験の内容・評価基準はかなり下げている．
・アンケートではあまり理解できていないとの回答をしているが，試験では合格レベルの点数が取れている．学生の自信の無さの表れ？
・もっと基礎的な内容だけを教えて欲しいとの要望多し．
・興味を膨らませようとしない．課題等を出し，自分で調べさせるなどして興味を湧かせる工夫が必要．
・3 年生まではそれほど印象に残らなくても，4 年生になって研究室に分属されたのちの様子をみると，ポテンシャルは持っており，決して質が低下しているわけではない．

【まとめ】
2.2.3 で示されているように，多くの教員が授業方法について毎年改善を試みているにも関わらず，理解度が低下しているのは学生の質の変化に教員側が対応し切れていないためであ

る可能性が考えられる．できるだけ学生との対話を心がけ，理解度をきめ細かく把握することが重要と思われる．しかしながら，学生の質を保証するためにも授業内容のレベルを下げることは避けるべきであることから，この事案については今後も試行錯誤が続くものと思われる．

2.2.2　授業公開

以前より，生物資源学部では全講義を対象に随時公開制をとっている（参観希望者は事前に担当教員に連絡）.今年度も全授業を公開対象としていたが，参観した教員はいなかった.

2.2.3　授業改善のための工夫

昨年度より，各教員が担当する講義，実験での工夫をまとめることとなった．多くの教員から授業の参考になるとの意見があったこと，そして、情報の共有化だけでなく、教員自身の振り返りポートフォリオとして有用であると考えられたからである．本年度は後期においても同様のまとめを行うと同時に，各学年における学生の特徴等を把握するため，授業を担当しての感想も依頼した．これらの資料は，取りまとめたのち全教員に配布した．その結果を以下に記す.

2.2.3.1　教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため，工夫していること（前期）

授業科目名	曜日・コマ	担当者	授業方法，あるいは授業工夫内容など
分子生物学	木曜 2限	石川敦司	本年度も授業の理解度を高めるために，動画を見てもらった．学生のコメントを見ると，概ね好評であった．来年度以降も続ける予定である．
分析化学	火曜 1限	植松宏平	例年，講義内容が難しい等のコメントをよく受ける．本年度は，説明に充分な時間が充てられるよう，講義は全てスライドを用いて行った．また学生が講義内容の理解のみに集中できる様，スライド資料を事前に配布した．前期試験の結果を見るに，学生の理解度向上に，ある程度の効果はあったように思われる．しかしスライド資料を事前に配るためか，講義への集中力を欠く学生もみられた．
応用微生物学Ⅱ	火曜 2限	宇多川隆	学会やセミナーで得られた情報に基づいて，テキストの更新を図った．また，重要度の低い項目を削除し，テキストの消化不良にならないように努めた．応用微生物に関する新聞・雑誌・ネット情報（例えば，三井物産のバイオコハク酸事業等）を解析し，応用微生物業界の動向を考えさせるように工夫した．
農産物利用学	木曜 1限	大東　肇	前年度から特段の変更はなく，粛々と授業を進めた．本年度は，学生の出席率もよく，またそれなりに熱心に授業を聞いてくれたように感じている．前年度までの経験を踏まえ，授業内容において「化学的理解」ができるよう，特に糖質を材料に従前より時間をかけ，基礎からの解説を加えた．
植物病理学	金曜 2限	加藤久晴	昨年は授業の時間が足りなくなってしまったことから，本年度は講義の構成を再検討した．講義内容の重複や内容そのものを削る等により時間不足にはならなかったが，その分ていねいに解説を要する部分が増えてしまい，本年度導入する予定であった小テストに要する時間を確保できなくなってしまった．来年度は小テストを導入する代わりに，時間不足を防ぐために中間テストをやめることを検討している．また，独自のアンケートを行ったところ，重要な部分を色分けする等により教えて欲し

			いというものが複数あった．試験に出そうなところを教えて欲しい，という意味だと思うが，講義内容はすべて重要であり，説明不足となってしまった部分は自分で調べるようになどの助言をうまく伝えられるようにしたい．
科学英語Ⅰ	月曜 1限	川畑球一/ 吉岡俊人	まず科学論文に慣れてもらうため，資料として論文1本を配布して論文の構成や投稿から掲載までの流れを簡単に説明したのち，情報演習室で論文の検索を経験してもらった．冠詞や時制，助動詞など基本的な文法について，科学英語の特徴を踏まえながら説明した．また，英語の教科書（生化学）を和訳する回では，1 文ずつ学生に板書してもらい，訳とどのように考えてその訳になったかを簡単に発表してもらった．これは，（人前で）意見を発するという経験を少しでも積んでもらおうと考えて行った．この和訳の回では，講義に対する集中力や緊張感，一体感が特に見られたように思う．さらに，授業最終回では 1 分間英語プレゼンテーションを実施した．これは，大飯原発 3，4 号炉再稼働について賛成か反対かを表明してその理由を述べるというものであり，原発再稼働についての野田総理演説（英語版）を理解しておくことでプレゼンのための予備知識を得られるようにした．発表者全員が熱意をもって英語による原稿作成と発表を行ってくれており，有意義な試みであったと思う．
食品衛生学	水曜 1限	川畑球一	食品衛生は身近な問題であることを意識してもらえるよう，食中毒や放射性物質の汚染，食品偽装など最近の事件を頻繁に話題に取り上げ，かつ科学的視点でこれらの問題を考える力が身につくように説明することを心がけた．基本的には教科書の説明であるため，飽きないように補足の配付資料を充実させた．また，板書とノートのスピードを意識しながら講義を進め，次章に移るタイミングでは必ず質問などないか確認した．
動物生理学	火曜 2限	木元　久	複雑な生理機能の理解を助けるために，なるべく最新の教科書から美しいイラストを採用するように心がけている．個体レベルから，組織，細胞レベルへと説明を進めているが，細胞間の連携に関する興味が薄いと感じられたため，常に多細胞生物であることを意識させるために，毎回の講義で細胞間，組織間の連携について確認を行った．さらに，生命現象のまとめとして，エネルギー通貨としての ATP，食物の消化・吸収から各細胞への輸送，各生理機能の異常による病気についても解説することにより，多くの学生が多細胞生物を細胞レベルで理解することの重要性を認識してくれたように感じた．
一般微生物学	水曜 1限	木元　久	微生物は目に見えないために，どうしても動物よりも学生達の関心が薄いと感じた．そこで，講義の合間に，栄養寒天プレート上に指の腹を押しつけたり，抜いた髪の毛を置いて培養することにより，どれくらい自分たちの体に微生物がいるかをコロニーという形で目視により確認させた（個人が特定できないような配慮をしている）．その結果，コロニーの数や大きさ，色，形といった特徴が個人間で大きな差があることに対して学生達は素直に驚き，微生物に関する関心が高まったと感じた．
生体高分子化学	火曜 1限	黒川洋一 （日び先生と分担）	初回は，蛋白質科学の成立の歴史，「化学」の立場での蛋白質の分析法の理解の重要性や，蛋白質の有効利用など応用面を話したほか，昨年と同様に，講義冒頭で，前回の復習点，当日のポイント等の講義の流れの説明を行い，重要な項目は板書した．板書を移す時間を確保することは，集中するのに効果があるかもしれない．蛋白質の凝集などの身近な事象と，蛋白質化学との関係の話は関心を持たせるのに有効と思われた．また，蛋白質の化学的変化に伴うシグナル（グラフ）が意味する所を文章で表現させる試みを行った．

栄養化学	木曜 1限	高橋正和	例年通り小テストを3回実施後に中間試験を実施．期末試験とあわせて評価した．　開講して6年目となり，全体にマンネリ感もあるので，今年は最初の授業でビデオ教材（市販 DVD）を使用してみた．　興味が沸けばと期待したが，その程度は不明．少し長すぎたようなので，もう少し時間を短くすべきだったかと考えている．
微生物学実験	8回	濱野吉十（木元先生と分担）	生命科学分野で必須である微生物の取り扱いの習熟を目指し，基本操作に重点に置いて指導している．多くの医療用医薬品の創薬において，抗生物質を例に，微生物が利用されていることを身近に感じてもらえるよう実験内容を工夫している．また，実験の待ち時間を有効に活用するために，本実験の指導以外にも，「Today's Topics」と題して学生に様々な情報を提供している．例として，微生物実験で体験した技術・知識が実社会でどのように利用されているかを説明し，また，化合物が薬になるまでの過程や，民間企業と大学における研究の違いなどを紹介している．また，日本とアメリカの研究環境の違いや，大学教育の違いなどについても紹介している．これまでのところ，この「Today's Topics」を聞くことで，微生物学実験の実験内容により興味をもって取り組むことができると，多くの学生から高い評価を得ている． 以上の様に，教科書上だけの教育だけでなく，その教科書の内容をより身近に感じるよう工夫し，学生がより興味と重要性を感じながら能動的に学習できる環境を構築していけるよう努めている．
有機化学	金曜 2限	日幷隆雄	・LMS の利用 → 予習復習など自主学習の補助 ・確認テストと復習 → 化学 I&II の把握について確認し，必要な知識が欠落している部分について復習の講義を行う． ・キーノートの作成と配布 → 授業要点と教科書との対応の確認 ・動画教材の利用 → 分子シミュレーションを用いた化学反応機構の理解 ・実験や実習との連携 → 化合物のにおいなどかがせる，動画で観察させる，化学実験で確認するなど体験と組み合わせる工夫． ・演習問題 → 簡単な例題を解かせ，内容を具体的に把握させる工夫．
構造生物学	木曜 1限	日幷隆雄	・アンケート調査 → 学生が関心をもつ対象の把握． ・動画教材（ビデオオンデマンド）の利用 → 一流研究者の講義を聞いて研究や対象への興味を深めさせる工夫． ・企画作成の実習（学生自ら研究対象や作業仮説を立てさせ，調査し，報告させるとともに，内容を相互にピアレビューさせる）　→ 自主的・能動的な学習を促す工夫． ・最新の研究成果からみた基礎的な知見の検証 → 最先端技術の成果と問題点の評価をするとともに，基礎的知見をできるだけ分かり易く紹介する試み．
遺伝学Ⅰ	水曜 2限	村井耕二	毎回，授業の終わりにミニッツペーパーで授業内容に関する考察問題を解かせ，興味の喚起を図った．教科書の補足資料は極力カラーコピーとし，理解の手助けとした．中間試験では，網羅的に重要な事項の復習ができるように多数の問題を課した．板書を丁寧に体系立ててするようにした．常に熱い授業を心がけている．
生物資源学特別講義Ⅰ	金曜 1限 隔週	村井耕二	毎回，授業の終わりにミニッツペーパーで授業内容に関する考察問題を解かせ，興味の喚起を図った．教科書の補足資料は極力カラーコピーとし，理解の手助けとした．積極的に授業中に学生を指名し，対話できるように試みた．板書を丁寧に体系立ててするようにした．常に熱い授業を心がけている．

環境生物学	木曜 2 限	吉岡俊人	地球環境と人間の営みをどのように調和させるかについて，知識の暗記ではなく，受講生自らが問題意識をもって考えることに重点をおいた講義内容と目指した．そのために，学習項目を従来の 2/3 程度として 1 つの項目にかける授業時間を長くした．また，試験において独自性の高い課題発見や課題対応に対して高評価を与える設問とした．さらに，講義冒頭に期末試験で英語問題を出題することを宣言し，本授業分野に関連する英語語句を意識的に学ぶことを工夫した．

2.2.3.2　授業を担当しての感想など（前期）

授業科目名	曜日・コマ	担当者	感想など
応用微生物学Ⅱ	火曜 2 限	宇多川隆	質問が少ない（無い）のは，関心がないのか，理解できないのか，気になるところ．
農産物利用学	木曜 1 限	大東　肇	「化学的理解」を問う試験問題では，授業で述べたことを的確に捉えてくれている学生と，そうでない学生の両極端に分れていた．教える側の責任もあろうが，学生の授業に取り組む姿勢にも問題がありそうである．授業の目指す内容から「化学的な考え方」を基本としているが，基礎化学の習得度が極めて貧弱と感じた．今後，「化学」に限らず関連する学術分野における基礎学力の習得度の問題が浮上してきそうである．
植物病理学	金曜 2 限	加藤久晴	問いかけてもほとんど応答が無く，受講している学生の多くは非常におとなしい印象であった．試験答案を見ると，文字が非常に読みにくい学生が 2 名ほど見受けられた．人のことは言えないが，就活等今後のことを考えると，もう少していねいに筆記するよう助言した方が良いと思われる．
一般微生物学	水曜 1 限	木元　久	1 限目ということもあり，遅刻してくる学生が多い．朝が早いためか，飲食する学生は動物生理学よりも少ない．出席確認については動物生理学と同様に，私学のような学生カードによる入退室管理システムの必要性を強く感じた．
動物生理学	火曜 2 限	木元　久	若干名ではあるが，講義に 1 時間近くも遅れて来る学生がいる．例年より，飲食物を持ち込む学生数も多いと感じた．中には講義中に飲食する学生がいたため，注意をした．また，出席簿を回覧すると代筆が横行して不公平になるため，今年度から点呼により出席を確認したが，必修講義で学生数が多いため，かなりの時間と労力を消費（浪費？）してしまった．私学のような学生カードによる入退室管理システムの必要性を強く感じた次第である．
生体高分子化学	火曜 1 限	黒川洋一（日び先生と分担）	受講者が例年以上に多く，30 名近くいたが，途中で教室を入退室する者が目立った．講義を聞き，板書するなどの受講態度は総じて真面目と思われるので，ちょっと残念である． 蛋白質の化学を成立させた科学者の功績と，蛋白質の変性とを関連づけて何度か説明したのに，小テストの結果からは理解できていない者が多いと分かった．導入部は話の核心につながる部分であるのに，重要とは思っていないのだろうか？　暗記に頼り「キーワード」だけ書けばよいと思っているフシが見られ，どうも論理的に考えるのが苦手な者が多いようである．
栄養化学	木曜 1 限	高橋正和	気のせいか，「楽をして単位を取る」ことを重視する学生が増えてきた気がします．　全学的にカンニングの発覚事例が増えていることと呼応しているようにも思います．　学力低下（自主勉強時間減少？）に合わせて年々平易化してきましたが，暗記型の授業や試験は学生には疲れるだけで面白くもなく，印象にも残りにくいようなので，能動的に考えさせる機会を増やす工夫を取り入れたいと考えています．

微生物学実験	8回	濱野吉十（木元先生と分担）	学生達は，遅刻することもなく，まじめに実験に参加している．本実験では毎年，班のメンバーを学籍番号順ではなく，ランダムに選んでおり，実験開始初期は，班員に馴染めず意欲を見せない者が一部いる．しかし，実験の雰囲気に慣れると改善され，より能動的に活動している者が多かった．その一方で，最近は，積極的に質問をする学生が減少しており，やや気になるが，実験の最終日に行っているプレゼンでは，皆，実験結果と設定した課題について意欲的に班員とディスカッションし，プレゼンしている．このように，与えられた課題には取り組めるが，自ら課題を探索し，それを解決しようとする行動力が弱く，手厚い指導が必要かもしれない．
構造生物学	木曜1限	日并隆雄	アンケート調査では普段話しているだけでは分からない興味関心が把握できる．大学院講義では内容設定の自由度が比較的高いことや少人数であることから，興味を持てそうな対象にうまく絞って講義すると，学習意欲の向上に効果があることがレポートの内容から伺われた．企画作成の実習は，全体への動機付けやうまく行かない学生への配慮を十分に検討する必要はあるが，自ら進んで学習する様子が多くみられ，学習の仕方を学はせる上でも有効な方法と感じた． 学部生レベルだとどれだけ工夫しても興味を持てない学生がいるが，院生レベルだとレスポンスが確かな部分があるのでやりがいもあるし，効果も高い．
遺伝学Ⅰ	水曜2限	村井耕二	熱く授業をおこなうと，学生は興味深く聞いてくれる．板書を書き写すのが忙しそうに思える．もっと早くメモをとるように訓練すべき．PowerPoint の授業にすると，きっと書き写さずに，眠たくなるのかなあ．
生物資源学特別講義Ⅰ	金曜1限隔週	村井耕二	熱く授業をおこなうと，学生は興味深く聞いてくれる．なかなか，授業中に発言するのは難しいよう．なんとか，海外の大学の授業のように，対話形式の授業ができないか，模索中である．でも，大学院でもこれは難しいので，学部の授業では無理かな．
環境生物学	木曜2限	吉岡俊人	授業を通じて講義する項目を従来の2/3程度に絞って1項目にかける授業時間を長くした．そのために，本授業からだけでは最低限必要と思われる本分野に関する知識をカバーできない．学生の自主学習の意識が高くない中で，これをどうバランスするかを試行錯誤する必要がある．

2.2.3.3　教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため，工夫していること（後期）

授業科目名	曜日・コマ	担当者	授業方法，あるいは授業工夫内容など
生物科学	金曜1限	石川（加藤先生，濱野先生と分担）	遺伝子組換え作物についてのビデオ教材やニュース番組を見てもらい，それらに対する感想・意見を提出してもらった．映像は学習の理解を深めるようだ．
生物物理化学II	火曜2限	伊藤貴文（日び教授と分担）	学生がこれまで学んできた(はずの)知識や学生実験で利用してきた機器類の復習を意識しながら，机の上で学ぶべきことが，実験室や将来働く際にどのように利用されているかを知ることによって，それらに対して興味を持てるよう努めた．まず初めにポイントと授業の流れをまとめたプリントを配り，その日の授業の内容と方向を示した．そして，難しい理論のところは，簡単な実験で身近に感じられるようにし，実際に得ることができる情報と利用価値に重きを置いて講義した．
生物物理化	火曜	植松宏平	例年，講義内容が難しい等のコメントをよく受ける．本年度は説

学Ⅰ	1限		明に充分な時間が充てられるよう，講義は全てスライドを用いて行った．また学生が講義内容を理解することのみに集中できる様，スライド資料も配布した．しかし，学生の受講態度，試験結果を見るに，学生の理解度が向上したようには判断できなかった．講義内容をより基礎的なものに設定する必要があったように思われる．
応用微生物学Ⅰ	水曜 2限	宇多川隆	微生物を利用した醸造の世界を，黒龍の蔵元見学する事により学ばせている．特に古典的発酵の場合は，匠の技に依存するところが多く，科学的には説明しがたい部分がある．泡がはじけ，音を出しながら発酵し，醸し出される醸造香は教室では教えることの出来ないものである．蔵見学は今後も継続する予定である．
科学英語II	月曜 1限	大田正次 （林講師と分担）	工夫した点は３つ．１）担当教員の専門分野に偏らないよう，生物資源学の広い範囲の短文を教材とした．２）「家で和訳を作り授業ではそれを読み上げる，当っていない学生は発表を聞かずに次の文を必死に辞書を引いて訳している」という構図を避けるため，毎回１つの英文を初見で辞書を引かずに和訳させた．その後，英文は前から前から読むこと，長い文でも骨となる構造は単純であること，をていねいに解説した．３）継続した学習をさせるため，また，遅刻をなくすために，毎回の授業始めの２０分～３０分を前回の内容の小テストとし，単語，英文和訳の他に，簡単な和文英訳問題を出した．
植物育種学	金曜 1限	大田正次	とくに昨年度と内容は変わらないが，内容の大きな改訂をして２年目になるので，話す側にも余裕があった．昨年度は時間割の都合で前期月曜２限目に配置し，かつてない多数の履修者数であった．今年は例年どおりの時間割に戻り，履修者数は大幅に減ったが，授業を受けたい学生が履修しており欠席者も少なかった．授業で話す内容と資料は最初の時間にプリントで配布し，学生の予習復習の手助けとしている．
作物資源学	木曜 1限	大田正次	例年講義の後半に「生物資源学概論」で講義していた内容を，今年は最初の時間に導入として講義した．授業全体の概要と授業を受ける上での基礎知識を最初に話したことで，学生が授業を受ける心構えができたように思う．その他，できる限り，実物の標本，味見，現地調査のスライドなどで，抽象的になりがちな授業の内容を五感で感じられるようにしている．また，授業で話す内容と資料は最初の時間にプリントで配布し，学生の予習復習の手助けとしている．
環境生物学実験	後期 8回	加藤久晴 （塩野先生，吉岡先生，水口先生と分担）	前期の授業科目である植物病理学で講義した内容を踏まえて実験を組み立てており，振り返りができることから学生には（アンケート上では）好評である．なお，植物病理学を履修していない学生が毎年数名いるので，実験の前に長めに講義の時間を設けている．また，履修していない学生には実験の合間にできるだけ声をかけるようにした．比較的細かい作業が多いため，１日の作業内容をできるだけ少なくし，操作方法等の説明に時間を割けるようにしている．
生物科学	金曜 1限	加藤久晴 （石川先生，濱野先生と分担）	生物資源学部以外の学生も多く履修しているため，できる限り専門用語は用いず，ビデオ・動画などの映像資料を利用しながら解説している．あまり教科書では取り上げられない動植物に関する話題を扱うことにより，別の面から生物学に対する興味が高まるようにしている．
化学II	火曜 1限	黒川洋一	スライドの図は資料として講義冒頭に配布し，講義の流れを理解させる助けとしたほか，重要ポイントは板書を行い，ノートを取らせるようにしている．文字で近年，必修である当該科目の合格水準に達しない者が少しずつ増加する傾向にあったので，今年度はアンケートやミニッツペーパーを一回ずつ実施し，理解度を把握することに務めると共に，日頃からの意識付けの必要性にも言及した．また，例年同様に，有機化学の成立に関する歴史や，化

			学と日常あるいは先端の生命科学などとの関係についても触れたほか，簡単な化合物を見せたり，そのニオイを体験させる，分子模型に触れさせるなど，抽象的な概念をなるべく具体的に体験することで，関心を持たせるよう務めた．
環境生物学実験	後期7回	塩野克宏，吉岡俊人，水口亜樹（加藤先生と分担）	環境因子に対する植物の応答を解析するための実験の習熟を目指し，実験原理に重点を置いた指導をした．実験の待ち時間を利用して，初回に配布する手順書だけでなく原理説明のために資料を使い説明した．また，学生の理解を深めるため，班単位で実験原理をまとめてプレゼンテーションをする機会を設けた．待ち時間が長い実験が多くあったが，効率的に実験を進めるために，説明を受ける班と実験をする班に分けた．その際，主担当者が説明をしている間にその他の担当者が実験手順を説明するというように役割分担をして効率的に指導した．
植物栄養学	木曜1限	塩野克宏	高等植物の生存に必須である水と植物栄養素の吸収，輸送，同化の理解を目指し，個別の要素よりも全体像の把握に重点を置いて指導した．講義には板書とスライドを使用し，スライドの内容については配付資料として渡した．1限目からの講義ということもあり，遅刻や開始直後の集中力が低いことが予想した．そのため，開始直後には講義中のキーワードを書き取らせ，新しく出てくる専門用語の把握をするとともに集中力を高めるよう工夫した．学生の集中力が高い50分間を講義に，その後の時間をコラム的にリラックスして最新の研究成果や踏み込んだ内容の話をするというように，授業時間と内容にメリハリをつけた．また，理解度を把握するために，小テスト，班単位でのプレゼンテーションおよび中間試験を実施した．また，小テストにはコメント欄を設け，よかった点や改善点を挙げてもらった．
食品化学	火曜2限	高橋正和	食品中に含まれる化学成分の構造と機能について，食品サンプルなどを時々回覧しながら実施している．内容は一般的な教科書をベースにしており，プリントを配付して講義資料としている．最近は時間の都合もあり，配付プリントの内容すべてを説明できるとは限らず，一部は興味がある学生向けの自主勉強資料としている．　勉強の機会を作るために，小テスト3回実施後に中間テストを行い，最後に期末試験を実施している．中間試験と期末試験の2回，独自にアンケートを実施しており，理解度のチェックと同時に学生の要望を確認している．この数年，今後の講義のあり方についても質問しており，「もっと広く浅い方が良い」「もっと狭く深いほうが良い」「難易度はさておき面白いものが良い」「今のままでよい」から選ばせてみると，「今のままが良い」が一番多い．
遺伝学II	月曜1限	松岡由浩	授業では，遺伝学を学ぶ上で必要になる基本的な概念・考え方を解説した上で，それが理解できているかどうかを確認するための問題演習を多数実施した．
生物学II	金曜2限	村井耕二（オムニバス）	生物を高校で履修していない学生も理解できるように，植物学と遺伝学の基礎の基礎から，特に用語でつまずかないように十分な説明を行うようにしている．毎回，授業の最後にミニッツ・ペーパーを配り，授業の理解度を調べるとともに，質問できるようにしている．
緑地生態学	木曜2限	吉岡俊人	授業内容を自分で咀嚼して記述として残す「ノートとりの大切さ」，「自ら問題を発見考察する志向」，および「英語の必要性」を意識させることを目標にした．そのために，初回授業に際して，試験における①自筆ノートの持ち込み可，②英語設問の出題，③問題発見・解決法提案型設問の出題を宣言した．これを補助するために，ハンドアウトやパワーポイントに示した図表も板書し，用語やテーマを英語表記した．

2.2.3.4　授業を担当しての感想など（後期）

授業科目名	曜日・コマ	担当者	感想など
生物物理化学2	火曜2限	伊藤貴文（日び教授と分担）	生物物理化学は理解するには相当な時間がかかり難易度も高いが，学び続ければ生命現象を説明するのに重要であることに気づき，楽しい内容である．そのため，学生に辛くならないよう，嫌いにならないように気をつけたが，実際にはどうだったのかは気になります．来年度は，復習としての演習問題だけでなく，わからなかったところやもっと知りたいところをアンケートで回収し，次週の授業に反映させていこうと思います．
生物物理化学Ⅰ	火曜1限	植松宏平	講義内容を十分理解するには，学生の自主学習が必須であり，学生の学習意欲をいかに高めるかが課題であると感じた．
応用微生物学Ⅰ	水曜2限	宇多川隆	授業の一環としての黒龍酒蔵見学者は，今年度４７名に達し受講者の殆どが見学したことになる．５年目になるが年々希望者が増えていくことは嬉しい事であり，多くの学生が微生物の働きに感動したと思うが，一回で見学する人数としては限界に達しているのではないかと懸念している．見学後の質疑も活発に行われ，予定時間を大幅に超えたしまったことは，学生の関心の強さを示すものとして高く評価したい．
科学英語II	月曜1限	大田正次（林講師と分担）	予習の負担をなくしたことで，学生が授業に集中できるようになったと思う．その代わり，３０分でよいから毎日復習して英語に触れるように指導したが，たぶん誰も実行していないだろう．学生の英語力を低下させないためには，カリキュラム上で毎日英語に触れさせる，とくに簡単でよいから英作文させる工夫が必要と思う．
植物育種学	金曜1限	大田正次	履修者数が１０人程度と少なかったため，教えるのがたいへん楽だった．学生も授業内容を理解しやすかったのではないかと思う．選択科目では，講義を受けたい学生を少人数で教えるのがやはり理想的であると感じた．
作物資源学	木曜1限	大田正次	植物遺伝資源についての概要を最初に講義したのは正解だったと思う．今年は履修者数が多かったが，全体に成績もよく内容を理解してくれていたと思う．
環境生物学実験	後期8回	加藤久晴（塩野先生，吉岡先生，水口先生と分担）	時期的に実験操作にかなり慣れてきているようで，難しいと思われる作業もそつなくこなしている学生が多いようである．ただ，グループによっては，早く帰りたい一心でテキストも熟読することなく勝手に進めてしまい，失敗してしまったケースがあった．また，事前説明とテキストの内容だけで満足してしまうのか，以前より質問をしてくる学生が減っているようだ（TA の学生が代わりに対応してくれたケースもあるが）．
生物科学	金曜1限	加藤久晴（石川先生，濱野先生と分担）	出席している学生の半数が生物資源学部以外の学生である．生物資源学部および看護福祉学部の学生は真面目に聞いている者が多いが，他の学部の学生は寝ていたり，明らかに別の作業をしている姿が目に入る．時折おしゃべりの声が耳に入ったため，その都度注意した．
化学II	火曜1限	黒川洋一	必修の専門科目なので，当該科目の好き嫌いに関わらず，全員に受講し，かつ合格を目指してもらう必要があり，講義に集中してもらう．身近な所で使われている化合物や，その歴史的背景などを取り上げたり，調べさせることは，関心を持たせたり，化学への苦手意識を払拭するのに一定の効果があるのかも知れない．講義の流れを整理して説明しているが，講義内容の絞り込みと，スライドと板書の適度なバランスを取ることは，今後も必要と考えている．化学は苦手だとする学生でも，その多くはテストやレポートにも真面目に取り組んで，合格ラインをクリアしてくれたことは，彼らの努力によるものと思われるが，その一方で，合格ラ

			インに達しなかった者には，論理的な思考力や表現力が弱い傾向が伺え，集中力に欠ける，遅刻が多いなど，講義以前の態度の問題も背景にあると考えている．彼らが，自ら改善し，努力するよう気づいてもらう他ないだろう．
環境生物学実験	後期 7 回	塩野克宏，吉岡俊人，水口亜樹（加藤先生と分担）	実験の合間などに学生と意見を交換していると，実験に対して意欲的というよりも，早く終わらせて帰りたい．という気持ちが強いように感じた．待ち時間が長いので，待ち時間をさらに短縮すること．また，学生が手を動かして実験できるステップを増やすなど，実験に集中できるアレンジが必要であると感じた．
植物栄養学	木曜 1 限	塩野克宏	小テストのコメント欄を設けたのが良かったと思う．授業終了直後にコメントが読めるため，改善ポイントなどの把握がしやすかった．数回分の講義内容に関連する身近な内容について出題し，班単位でプレゼンテーションをしてもらった．学生達は予想していた以上に自主学習をし，講義内容を上手に身近な例と関連づけて説明できていた．今の学生は総合学習に慣れているせいか，グループを作っての発表が上手であると感じた．理解度について学生同士で採点できるよう工夫し，質問にも質問点を設けるなどゲーム性を持たせたためか，次々と質問があり質疑も白熱した．コメントなどをみても「楽しかった．」など，学生の満足度も高かったようである．理由は分からないが，正月明けから，出席率が 80%から 70%(登録人数 24 名)に減少し，遅刻も見られるようになった．原因を把握し，来年度に生かしたい．質問として講義中に聞くことができないが，コメント欄などに質問を書いてくれる学生もおり，こういった質問を引き出す工夫をして講義を活発化したいと思う．
食品化学	火曜 2 限	高橋正和	小テストと同じ問題を中間試験に混ぜていますが，何度も同じ個所を間違える学生もいるようです．その理由をアンケートで尋ねると，「勉強不足」の回答が一番多い．また，何度かコツを教えているつもりですが，化学式に苦手意識を持っている学生には，抵抗感があるのかもしれません．
遺伝学 II	月曜 1 限	松岡由浩	やや難しい内容を含む講義であるのにも関わらず，多くの受講生の熱心な取り組みが印象に残った．
生物学 II	金曜 2 限	村井耕二（オムニバス）	興味深い内容の話をすると，熱心に聞いてくれるのがうれしい．こちらも張り合いがでるので，さらに，興味深い内容にしようと思う．興味を持ってもらうのが，最善の教育だと思う．
緑地生態学	木曜 2 限	吉岡俊人	試験時間にノートを点検したが，板書以外の口述や自分の考察についてはほとんどノートされていないようである．既存の「教科書」があることの勉強習慣からなかなか脱却できないと感じる．来年度は，討論型授業を取り入れながら上記の改善を意識させるようにしたい．

2.2.3 .5　学生の理解度を把握するための試み（後期）

第 2 回の会議において，中期計画（23 年度計画）に記されている「講義について，学生と教員の話し合いの場を持つように工夫する」という項目について，本年度後期よりそれを実施することを教員に依頼することとなった．具体的には，15 回の講義の中間頃（11～12 月）に，授業中に講義の内容・進め方などに関して学生との意見交換の場を設けるというものである．この件について，生物資源学部の各教員において実施された内容を以下に記す．

授業科目名	曜日・コマ	担当者	ミニッツペーパー，小テスト，独自のアンケート，LMS等によるやり取りなど
生物科学	金曜1限	石川（加藤先生，濱野先生と分担）	ミニッツペーパー
生物物理化学I	火曜1限	植松宏平	講義に対する質問や要望等があれば，メールでもよいので連絡するよう伝えたが，学生からの回答はほとんど得られなかった．学生が意欲的に意見・質問できる講義を模索したい．
応用微生物学I	水曜2限	宇多川隆	授業アンケートの意見欄に「普通のビールと黒ビールの違いについて」の質問が記されていたが，無記名であり回答できなかったので，この欄で答えます．ビールの原料である麦芽を乾燥するときに，強く熱し麦芽中の糖分をカラメル化（褐色に色がつく状態）したものを発酵させると，黒ビールが出来ます．
環境生物学実験	後期8回	加藤久晴（塩野先生，吉岡先生，水口先生と分担）	実験の待ち時間を利用して，できるだけ学生と会話するよう心がけた．一番意見として多かったのは，やはり班当たりの人数が多いため（基本4名/班），実験操作に携わる時間が十分でないことが不満である，という内容であった．レポート提出の際，講義に関する感想や意見を記述してもらったが，前期の講義内容を実験で確認ができたことに対する喜びのコメントが多かった．
生物科学	金曜1限	加藤久晴（石川先生，濱野先生と分担）	大教室での講義は不慣れであり，また生物資源学部以外の学生も多いため，意見を交換するタイミングがつかめなかった．授業評価アンケートの対象科目ではないので，期末試験時に独自にアンケートを実施した．講義内容は概ね好意的な意見が多かったが，ほとんど板書しないことから，配布するプリントに空欄等を設けて欲しいとの意見が複数あった．
化学II	火曜1限	黒川洋一	第一回目の講義にて，化学の好き嫌い，今後化学IIの講義をどう進めて欲しいかなどを，記名式アンケートで聞き取った．講義内容と，専門科目や生活との関わりについては，今後も取り上げて欲しいとの声が多く，毎年継続している．例年どおり，「化学に苦手意識を持つ者」は，「簡単な内容を要求」する傾向にあった．アンケート翌週には，基礎から理解できるようじっくり指導する旨を伝えた上，講義を聞き，ノートをしっかり取って復習するよう指導した．ミニッツペーパーやレポート作成を通じても，文章作成力のための取り組みが必要だと説いた．
環境生物学実験	後期7回	塩野克宏，吉岡俊人，水口亜樹（加藤先生と分担）	アンケートなどは実施していないが，実験の合間などに学生との意見交換を心がけた．意見の一例としては，「班構成に飽きがあるので班の構成は名簿順よりもランダムの方がよい．」「レポート作成のポイントを説明して欲しい．」などがあった．これら意見には，実験期間中に反映した．実験の最後などにアンケートを実施する機会があるとより全体の意見が集約できるので，来年度の導入を検討したい．

植物栄養学	木曜 1限	塩野克宏	小テストにコメント欄を設けて毎回，意見をやりとりした．また，中間試験，プレゼンテーション，期末試験の方向性なども予定している案をみせながら，講義中に多数決などの方法で学生の意見を出してもらった（口頭で質問をしても返してくれる人はいないため）．14回目の講義の終わりには無記名でコメントをしてもらった．意見の一例としては，「板書を書き終えるのを待ってくれるのがよい（書き取りの速度が違うので遅い人に合わせるようにし，板書を終えてから説明をするように心がけていた．）」．「黒板の字を濃く，大きくして欲しい．」「〇〇について初めて知った．」など講義を進める上で，役に立つ情報を多く得られた．
食品化学	火曜 2限	高橋正和	小テストや中間試験時の独自アンケートで学生の意見を吸い上げようとしています．またこのほか，授業中に指名して答えてもらう機会を意識的に取り入れていますが，その際の答え方も，学生の理解度や授業をフォローできているか，の参考になっています．
遺伝学II	月曜 1限	松岡由浩	約半分の講義が終わった段階で受講生と授業の進め方に関する意見交換を行い，後半の講義の参考とした．
生物学II	金曜 2限	村井耕二（オムニバス）	毎回のミニッツ・ペーパー

2.2.4　FD 研修

以下のF-レックスの研修事業である第3回FD合宿研修会に参加した．

日　時：2012年9月3日～4日
会　場：仁愛女子短期大学
参加者：加藤久晴　准教授，高橋正和　准教授

＜報告者　加藤久晴＞

FレックスのFDチーム企画による，第3回の合宿研修会に参加した．今回の主旨は教員のスキルアップを目指すものであり，1日目は①講演「学習の質の評価」（京都大学・松下佳代先生），②パネルディスカッション「学習評価と質保証」（京都大学・松下佳代先生，仁愛大学・犬塚　學先生，福井県立大学・寺島喜代子先生，仁愛女子短期大学・田中洋一先生，福井工業大学・杉原一臣先生），③意見交換「キャリア教育」（福井YEG・高木秀樹氏，朝田健一氏，福井大学・田村信介先生，敦賀短期大学・北野皓嗣先生，福井県立大学・中里弘穂先生），④夕食会，⑤情報交換会が行われ，2日目は⑥「ティーチングポートフォリオ」と題して栗田佳代子氏（大学評価・学位授与機構　評価研究部）による講演およびミニワークショップが行われた．以下，①～③および⑥について記す．

①さまざまな視点からの評価法を紹介．単純な試験（正解・不正解の2つ）だけでの評価だけでなく，パフォーマンス評価：思考の過程を表現させる課題を出し，思考力，判断力，表現力などのパフォーマンスを，みんな（学生同士）で評価しあうというもの．教員による評価に，その結果を評価として加える．生物資源学部での実験・実習などでも取り入れることができるかもしれない．

②県内各大学での取組の紹介．ディスカッションの時間はほとんど無かった．
県大の寺島先生により, 看護学部における教育内容, 授業の流れ, 授業方法などが紹介され, 特に学生に自信を付けさせることで学習意欲を向上させることにポイントを置いている点が印象に残った．

③福井YEG：活動に関する説明がなされた．商工会議所青年部の方からもっと大学に対する意見を伺いたかった．意見交換ではなく，報告会に終わった感あり．

⑥ティーチングポートフォリオとは，教育改善のため，自らの教育活動についての振り返りをするための記録のこと．その作業を講演と実習を通して紹介していただいた．具体的にどのようなものを記録（エビデンス）として集めていくかなど．紹介された内容を大学組織として推し進めるには，相当の時間を教育に捧げる覚悟が必要と思われる．なお，県大が行っている授業評価アンケート，そのアンケートに対する回答，今後の授業への対応（シラバス内容の変更）など，それだけでも自己の振り返りをすることになるので，個々の教員が授業改善を行ってゆくための手段としては最低限，今後も継続してゆくことが大切だと感じた．

2.3　海洋生物資源学部（加藤辰夫・水田尚志）

2.3.1　授業評価アンケートの結果と対応

海洋生物資源学部の平成 24 年度の授業評価アンケートへの参加は前年並みで，とくに後期においてアンケート実施期間外の授業や複数の教員が担当している科目が多いことから，現状以上の参加率の向上は見込めないことが明らかになった．コメント回答率についても，平成 24 年度前期までに高くなっており，これ以上の向上はあまり見込めない．

授業評価の学部の平均点が平成 22 年度と 23 年度のとくに後期においてかなり顕著な低下傾向がみられたことについて，学部内で原因の調査と対応の検討をおこなってきた．平成 24 年度後期も評価点は横ばいで改善はみられなかった．項目別の平均値については，「授業の内容が理解できたか」「この授業の分野への関心が高まったか」が特に低い傾向があり，教員の努力にもかかわらず，学生が内容を理解できず関心がもてない科目がある．

授業評価の低下原因について明らかにするため，平成 24 年度において学部独自に授業評価結果の再集計を行い，対応策を検討してきた．その結果，学部のカリキュラム委員会において平成 25 年度からカリキュラムを改正し，特に評価が低い科目については科目名を変更して内容をみなおし担当者を複数にすることなどを決定した．平成 24 年度についてはカリキュラムの変更が時間的に無理だったので，カリキュラムの変更の効果は平成 25 年度以後に期待することになる．

平成 23 年度授業評価の再集計の結果として明らかになったことは以下のとおりである．

１）平成 22～23 年度の授業評価では学部化にともなって配置された科目が評価の対象となり，とくに 23 年度後期の対象科目数が大幅に増加した．そのため，学部別平均点ではなく科目別に比較してみる必要があった．

２）選択科目よりも必修科目の評価が低く，本学の学部別平均点の算出方法は学生数による加重平均となっているため，1 科目でも極端に評価が低い必修科目があれば，学部別平均点を 0.2 点くらい低下させる可能性がある．

３）後期の学年別に再集計した結果，1 年次が低く，2 年次，3 年次と学年が進むほど高くなる傾向がある．本学部の場合，基礎的な必修科目が 1 年次に配置されており，評価が低いことは学習に問題のある学生に対して教員が対応できないことが示唆された．

４）科目別にみると，必修科目で抽象的な内容の科目ほど評価が低い傾向がある．これは，学生の基礎学力の不足と格差の拡大，教員側の対応の難しさが原因であると考えられる．とくに 1 年の必修科目で評価が低い科目については，学生の状況に対応できるように担当者の複数配置やカリキュラム配置の見直しをおこなう必要がある．

2.3.2　授業公開

下記1科目について授業公開を実施した．当学部においては随時公開ではなく，特定日を公開して参加をよびかける方法をとった．参加教員は全教員の4割にあたる10名で，そのうち7名の方から御意見をいただいた．

【実施概要】

担　当　：長谷川健二教授　ほか3名

授業科目：地域活性化演習A

受講者　：海洋生物資源学部3年次生

場　所　：小浜市内　食のまつり特設会場

公開日　：10月7日（火）10時から12時

参加教員数：10名

この演習は，学生が地域の水産物を調理加工し，地域の中で販売し，地域の人々と交流する内容です．今年度はサワラのすり身を加工保存し，三種の味付けをしたシューマイを，小浜市の食のまつりで販売しました．調理加工は事前におこない，授業公開では，食のまつりにおける販売をみてもらいました．

授業公開への参加教員から以下のような意見をいただきました．

１）学生の活動の様子

授業公開の時は荒天であったが，学生が笑顔で接客していてがんばっていた．

商品の特徴や活動の趣旨を説明するものが不足している．

２）商品（海鮮シューマイ）の味などについて

塩味が効いていてとても美味しかった．

カレー味が強すぎてサワラの海鮮味が消えてしまった．

３）改善したらよいこと

商品のインパクトが他店に比較して弱いので，サイズを拡大するなどの工夫が必要．

もっと積極的な呼び込みをするなど接客の改善が必要．

担当教員からの回答です．

授業公開の前日に準備していた商品の説明資料が，荒天のため夜間に吹き飛ばされてしまい，授業公開の時には使えなくなっていた．授業公開のときも荒天であったため準備ができなかったのは残念だった．その後，修復し呼び込みをおこなった．商品の製造作業に力を入れていて，出店の準備や販売のための訓練が十分にできていない点は反省材料です．

2.3.3　FD 研修

今年度の FD 研修は，仁愛女子短期大学において開催された F-LECCS，第 3 回 FD 合宿研修会へ参加した．大学院入試と日程が重なっていたこともあり，参加者は 1 名であった．

（１）開催日：平成 24 年 9 月 3 日（月）～4 日（火）

（２）場所：仁愛女子短期大学（福井市）

（３）内容：ティーチング・ポートフォリオ作成，学習の質の評価など

2.4　看護福祉学部（深沢裕子，塚本利幸)

本年度実施した授業評価，授業公開，FD 研修を以下で報告する．

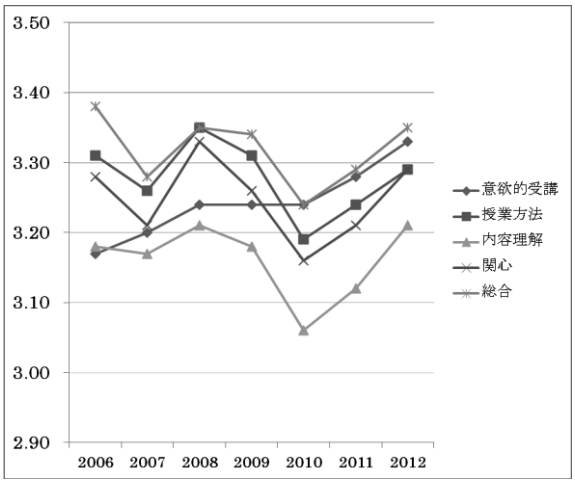
2.4.１ 授業評価

2.4.1.1　看護学科

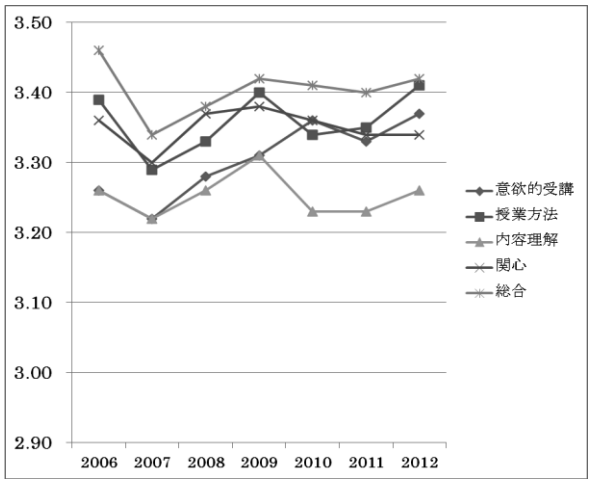
授業アンケートの結果について，まず昨年度と比較してみると「意欲的受講」「授業方法」「内容理解」「総合」はいずれも上昇した．「授業への関心」については，前期は昨年より上昇したのだが，後期は昨年よりごくわずか低下した．

次に過去 7 年間の推移をみてみる．2010 年前期に「授業方法」「内容理解」「授業への関心」「総合」が他の年に比べて低くなっているのが目立つ．しかしこの低下は，約 0.1 ポイントで，翌年にはおおよそ元の値に戻っている．この点を除くと，7 年間ほぼ 3.1～3.4 の間で全項目が高低を繰り返しており，一定の傾向は認められない．

以上のとおり学生アンケートからみた授業評価は，総じて良く特段の変化がないと言える．



看護学科　授業アンケート結果（前期）



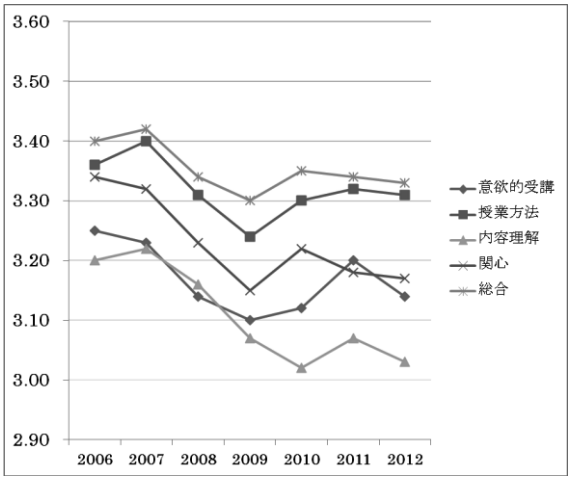
看護学科　授業アンケート結果（後期）

2.4.1.2　社会福祉学科

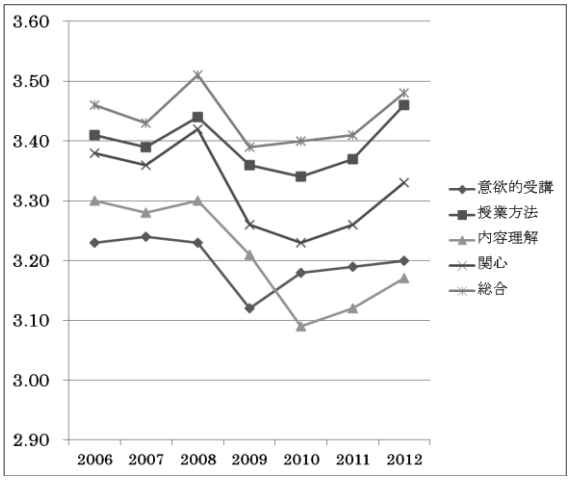
授業アンケートの結果について，まず昨年度と比較してみる．前期に関しては，すべての項目で得点が低下しており，「意欲的受講」と「内容理解」で低下の幅が大きい．後期に関しては，すべての項目で得点が上昇しており，「意欲的受講」以外の項目で上昇の幅が大きい．

次に過去 7 年間の推移をみてみる．前期に関しては，2009 年の得点が，ほぼすべての項目で，他の年に比べて低くなっている．後期に関しては，2008 年の得点が，ほぼすべての項目で，他の年に比べて高くなっている．前期の「内容理解」を除くと，7 年間ほぼ 3.1～3.5 の間で全項目が高低を繰り返しており，一定の傾向は認められない．「内容理解」に関しても，後期は上昇傾向にあり，必ずしも長期的に低下傾向にあるとは判断できない．

以上のとおり学生アンケートからみた授業評価は，総じて良好であると言える．



社会福祉学科　授業アンケート結果（前期）



社会福祉学科　授業アンケート結果（後期）

2.4.2　授業公開

2.4.2.1　看護学科

看護学科では，前期に9科目，後期に7科目が随時公開されたが，参観した教員はなかった．このことは残念ではあるが，他のしくみで授業改善への取り組みが行われているので，少し報告しておきたい．看護学科はオムニバス授業が多いのだが，担当する教員同士で検討を行う機会がある．同様に，演習では複数の教員がかかわること多いので，そのような機会には授業方法についての話し合が行われている．臨地実習においては，学生の思考・判断、行動を教員は目のあたりにする。自ずと授業を振り返ること、授業改善へと繋がっていく。また，教員有志の学習会がこの1年間継続的に開催され，学生の看護実践能力向上に向けた教育的支援について検討の場がもたれていることも報告しておきたいと思う．

2.4.2.2　社会福祉学科

社会福祉学科では，前期に3科目，後期に3科目が随時公開されたが，参観した教員はなかった．このことは残念ではあるが，他のしくみで授業改善への取り組みが行われているので，少し報告しておきたい．社会福祉学科は演習，実習科目が多いため，定期的に連絡会議が開催され，その際に，担当する教員同士で授業の内容や方法を検討する機会がある．また，社会福祉士，精神保健福祉士の資格認定に関連して，カリキュラムの変更が学科開設以来，何度か行われている．その際には，学科の教員全員で，講義科目の構成や位置づけ，配当年次に関して，検討の場がもたれている．このような形で，学科体として，学生の教育環境や教育支援をより効果的に行うための取り組みが繰り返されていることも報告しておきたい．

2.4.3　FD 研修

2.4.3.1　看護学科

◇学外研修
意志ある学び　未来教育プロジェクト学習 2012
　―自ら考え判断行動できるために―
主催：シンクタンク未来教育　鈴木敏恵他
日時：2012 年 8 月 18 日（土）9:00～16：00
場所：ワークピア横浜
研修参加：吉村洋子，笠井恭子，月僧厚子，深沢裕子

研修会概要：
　プロジェクト学習は，自分達で課題を設定して解決していく学習方法である．私達が参加したのは，このプロジェクト学習を効果的に行う方法について解説する研修会であった．
　なぜ，プロジェクト学習なのか．知識伝達が多くを占める授業を受け，ペーパーテストで能力を評価される教育を受けてきた学生達にとって，自ら課題を見出し、それを達成していく学習には大きな意味があるのではないだろうか．
　未来教育プロジェクト学習には，重要ポイントがいくつかある．最初のポイントは，課題をどう設定するかということである．学生が真剣さと手ごたえを感じることのできる課題でなければならない．なんとかしたいと思う課題，自分ごとと感じる課題が必要なのだ．「学習の課題」「自分の課題」「社会的課題」の 3 つの要素を合わせもつ課題を学生が見出すことができるように，教師がコーチングしていく．こうやって決めた課題を，ポートフォリオの最初のページに入れる．ぶれずに課題に向かうための工夫である．ポートフォリオには，ファイリングに手間のかからないクリアポケットファイルを用いる．教師は，学生のポートフォリオをみることによって課題がはっきりわかり，課題解決に向けてコーチングすることができる．
　ポートフォリオの 3 ページ目からは，自分が手に入れた情報，自分が生み出した考え，気づきメモなどを入れていく．つまり「課題解決プロセス」がポートフォリオという一冊のファイルになるわけである．このようにポートフォリオを用いると，「俯瞰」「可視化」ができるしくみになっている．
　全てを紹介することができず残念であるが，未来教育プロジェクト学習では，最後にポートフォリオの中身を「提案書」や「ガイドブック」のような成果物としてまとめる．その成果物には，課題がエビデンスとともに明記されており，読んだ人がその通りやれば課題が解決すると納得できる現実的で具体的な方法を書く．つまり「まとめのレポート」ではないのだ．創造する喜びや楽しさと，それが他者のために役立つものであることで自信や前向きな使命感が高まることを大事にしている．
　最後に，もうひとつ重要なポイントは，未来教育プロジェクト学習で教師の行っているコ

ーチングの究極の目的が，学生自身がセルフコーチングできるようになることである点である．現実としっかりと向き合う姿勢をもつこと，自分や社会の未来はこうであってほしいというビジョンを描けること，そのビジョンと現実に差があるならばどうしたらいいかと前向きに考えることができること，そういう精神を育てる理念がこの方法に包含されている．

最後に，この授業方法を取り入れている教員がその成果について報告してくれたので，研修会資料から引用させてもらうことにする．入浴出来ない方のからだを拭くという看護技術演習において，未来教育プロジェクト学習を用いた濱田眞由美氏の報告である．従来の授業方法との比較が表に示されている．学生の学習姿勢に明らかな違いがみられる．（深沢）

（表）未来教育プロジェクト学習と従来の授業方法の比較　　濱田眞由美

	未来教育プロジェクト学習 「倦怠感が著しい患者に安全安楽に全身清拭を実施する方法（コツ）提案集を作る」	従来の授業方法
演習中の反応	手順を理解できており，援助の中断が少ない．	次にどこを拭くか指示が必要．援助中断が多い．
患者役（学生）のフィードバック	もっとこうしたほうがきもちいい，拭く力が弱いなど具体的	何か気持ち悪い，大丈夫など抽象的，または無反応
所要時間	45～50 分	60 分以上
教員への質問や意見	・ ○○○な人へは，どうやって拭けばよいのか． ・ささえるだけでなく，私の腕をもってもらうと安定して楽になるんです． ・どうやったらもっと温まるの？ ・拭く力加減は，年齢によって変わるのでは？	・50 度の湯で絞れなかったり，30 分以内で拭けなければ不合格ですか． ・時間がかかるので石鹸は使わなくてもよいですか． ・先生によって指導方法が違うので困ります．
教員の変化	学生の能動型学習を重視することで，学生の反応から共に学ぶ姿勢に変化してきた．	

（研修会「意志ある学び　未来教育プロジェクト学習 2012」配布資料より引用）

2.4.3.2　社会福祉学科

◇学内研修

１．ソーシャルワーク実習教育

　ー現場と大学を繋ぐスーパービジョンのあり方ー

講師：東京国際大学　人間社会学部福祉心理学科　准教授　村井美紀

日時：2012 年 7 月 26 日（木）14:30～16:45

参加数：26 名

研修概要：

・研修の主旨

社会福祉実習教育において，一昨年より新カリキュラムが導入され，ソーシャルワークの実践力を身につけるための実習教育の在り方が問われるようになった．新カリキュラムの特徴として，実習プログラムの構造化，実習教育指導の強化が挙げられるが，それに見合った実習時間に関しては，現状維持であり，矛盾が生じている．

そんな中で，本学の実習指導教員は，新カリキュラムに伴う課題を整理しながら，より質の高い実習指導を行う為に，現場の指導者との連携を取りながら実習指導を行うにはどうしたら良いのか，そのヒントを得るために，この分野の一人者である村井美紀氏をお招きし，学習会を行った．

・研修の内容と学び

研修内容の中で，村井氏が強調したのは，実習教育におけるスーパービジョンの重要性である．教員と学生をはじめ，現場の実習指導者と学生，学生同士のピアスーパービジョン，学生が自分自身を見つめるセルフスーパービジョンなど多様なスーパービジョンを適切に行うことで，より質の高い実習教育と学生へのフィードバックへの可能性を持つことができる．このことを確認できたことで，参加者の教員はじめ，現場の実習指導者が今後の実習指導を行ってゆく上で，大変重要な示唆を得た．

参加者は本学の教員と現場の実習指導者を合わせて 26 名であった．

・研修後の質問と講師からのコメント

講演の後で，参加者からは，実習先でのハラスメント体験について，学生が現場の指導者や担当教員に言いづらい場合，大学のハラスメント相談員に打ち明けることを勧めている．それについてどのように考えるかという質問がでた．

それに対して，講師は，学生が被害者になる場合だけでなく，加害者になる場合，あるいはたまたまそのような場面に出くわした場合など，いろいろなケースが考えられるが，いずれであってもまずは一番相談しやすい助言者に話すように指導しているというコメントをした．

２．原発事故広域避難者の生活・医療・福祉ニーズ

講師：ＦＦＦの会代表　川崎葉子

日時：2012 年 10 月 17 日（水）14:30～16:45

参加数：14 名

研修概要：

・講演の概要

・東日本大震災被災者と一口にいっても，福島県からの避難者は放射能のために戻ることが出来ないのだから，被災者というより被「害」者というべき存在である．

・大地震の際には「机の下にもぐれ」等という助言は役に立たない．家具のすべてが凶器のように飛んでくるので，とにかく外へ飛び出すほかなくなる．また，防災マップ

も役に立たなくなる．幹線道路は渋滞で通行がマヒするだけでなく，液状化するからである．

・当初避難所で配られたのは，家族 4 人におにぎり一個，翌日避難命令で移った次の避難所でも食パン 2 枚だけだった．福島県では原発事故による放射能もれが報じられて以来，一切物資が入ってこなくなった．

・避難命令が出ても行政が車を用意してくれたわけではなかったので，自力でなんとかするしかなかった．避難所に来る前に車を道路に乗り捨ててきた人，家族のなかに行方不明者がいる人等は容易に避難できない状況だった．

・避難者はいずれは自宅に戻れると思って急いで出てきたので，預金通帳や財布をもたず文字通り着の身着のままの無一文に近い状態だったが，それを理解せず貴重品を持ち出さなかったのはうかつだと非難されることもあった．

・川崎氏は原発事故による放射能もれを知ったとたん，指示がでていた避難先よりもはるかに遠方への避難所を最初からめざした．

・逃げた先の避難所では他市からの者ということで断られかけた．さらに事故を起こした双葉町等からの避難者は外部被ばくの検査をするように求められ，少しでも数値が出た者はアウシュビッツの収容所のように，その場で全身を頭からシャワーで流され，その避難所から出ていくように言われた．避難所を移動するたびに検査を受けさせられた者も多かった．

・テレビで映される避難所の姿は，福島県以外のところで，それも地震・津波から何日も経った後，撮影用に片づけて仕切りも置いて整えて撮った映像にすぎない．実際の地震直後の避難所では横になることもできず，断水でトイレが流れず風呂もなく泥靴のまま詰め込まれた人々の耐えがたい異臭が立ち込めていた．

・川崎氏一家は被曝検査で数値はゼロだったが，知人を頼って避難してきた福井県で，市が用意した団地に入居する際に，再び同じ検査をするよう求められた．外から放射能を持ち込むなということだろう．しかし避難者たちの内部被ばくについてはホールボディカウンター検査を福井県に要望しても断られてしまった．

・福島県内の銀行では指紋の本人確認で預金が下ろせるようになったが，県外に出た避難者はそれもできなかった．また，その間にも，商売で使っていたリース機器の料金が以前と同様に引き落とされ続けた．銀行はそれを止められないというので，残高をゼロにするしかなかったが，その結果 2 か月間料金の引き落としがされなかったということで，ブラックリストに挙げられ，クレジットカードを作れなくなってしまった．

・川崎氏一家は 3 月下旬に公営住宅に入居し，4 月 4 日には早くも一家総出でハローワークで求職活動をした．体調をこわした夫以外は仕事についたが，給料が出るまでの一ヶ月は大変だった．義捐金はなかなか届かず，届いてもわずかだった．かわりに 5 月になってようやく赤十字から冷蔵庫，テレビ，洗濯機，炊飯器，掃除機，電子レンジが提供されたが，必要に駆られてすでに自力で入手したものばかりで役に立たず，また換金も許されなかった．

・川崎氏はその後借り上げ住宅に移ったが，この制度も家族 4 人なら家賃は 6 万円の物

件までといった上限がある．家賃が 72,000 円だから，差額の 12,000 円は自分で払うというような融通が利かない．ここでも現物支給の制度であることがネックになった．

・福井県には東北各県から避難者が約 500 人来ていたが，避難指示の解除等で引き上げ，10 月現在の今は 300 人ほどが福井県内に残っている．ほとんどが放射能で帰れない福島県浜通りの人たちや中通りでも線量が高い福島市，郡山市，二本松市等からの自主避難の母子である．

・同じく放射能の被害を受けて家に帰れない人の中でも，何キロ圏内という意味のない同心円によって補償・賠償の有無が生まれ同じ自治体内で分断されてしまっている．

・避難者への嫌がらせは少なからずあり，そのため体調を崩しうつ病になってしまったり，母親が新聞に載ったということで子どもが学校でいじめられ，家族内で不和が生じたりといったことも起きた．

・母子の自主避難の場合は長期の別居のため福島県内に残っている夫や親との関係が悪化し「震災離婚」に発展していく．今回の地震や津波や放射能は，地域と家族を根こそぎ壊してしまった面がある．

・川崎氏は全国の知人から届いた大量の支援物資を他の避難者にも提供しようと福井県に広報協力を求めたが，最初は断られた．三国で提供会をやっても嶺南の人は行けないので「平等」ではないからという理由であったが，これは「平等という名の不平等」なのではないか．結局，開催個所を増やすということで協力してくれることになった．

・川崎氏はこの支援物資提供会をきっかけに当初は原発事故避難者に限らず広く被災者の会を立ち上げ，ボランティア団体とも連携して 8 月，10 月，12 月と各種のイベントを行い，弁護士や行政書士の協力も得て相談ブースも作った．東電との賠償交渉もこの弁護団に支援してもらえるようになった．

・川崎氏はその後新しく放射能の被「害」者を中心とした「FFF の会」をつくった．ふるさと福島の F，避難先の福井の F と「福幸」の F を表している．「復興」ではない．放射能に汚染された故郷の復興はありえないし，してはいけないからだ．

・川崎氏は現在福井県内で学習塾を経営し始めているが，福島県でやっていた頃のように 4 月になれば黙っていても生徒が集まるという状況ではない．避難するとうことはそれまで築いてきた信用，のれん，人間関係をすべて失うということを意味する．

・他県に避難した者，地元に戻った者，近隣に移った者のすべて，それぞれ人生が激変し，それまでとはまったく別の生き方をせざるを得なくなっている．高速道路も今は福島県に入るのは無料だが，来年 2013 年 1 月 15 日にはそれも終了となり，ますます経済的にひっ迫してくる．こういったことに何らの解決策も見いだせないまま，みなが悩んでいる．

・ボランティア団体も陸前高田等被災地への泥かき作業はやっても，たとえば何人も小さい子どもがいて，かつ，お産したばかりで雪かきができないとか，高い所に釘が打てない等といった細々とした日常の困りごとにはあまり対応してくれないことがある．だが，避難者が現実に困っているのは案外そういう事だ．そのために，福井にずっと居たいと希望していた高齢の避難者が福井の気候風土に恐れをなして出ていく

という状況も生まれている．

・参加者の感想

・早めの判断，機敏な行動で危機を脱出し，避難者同士が支え合う自助組織を自ら立ち上げていく川崎氏のバイタリティに感動し，かえってこちらが元気をもらった．

・原発事故からの避難者は地震・津波の被災者とは大きく異なる困難をかかえることがリアリティをもって理解できた．今後の福祉・医療における支援方法を考える貴重な参考になり，今後，学生への教育にも活かしていきたい．

2.5　学術教養センター（島田洋一・山川修・亀田勝見）

本年度実施した授業評価，授業公開，FD 研修を以下に報告する．

2.5.1　授業評価

本年度前期および後期の授業評価結果から，次の点が読み取れる．

・本年度は前期・後期ともに，前年度と比較して一般教育に対する総合の評価が上がっている．2007 年度以来の変化をたどってみると，前期は初めて 3.3，後期も初めて 3.4 を突破し，過去最高水準となっている．総合評価以外の要素を見てみると，後期については，意欲，授業方法，内容理解，関心全てにわたって前年度より上昇し，数年来低下を続けてきた要素が上昇に転じた形となっており，注目に値する．

・一般教育科目の割合が多いと思われる 100 人以上の大人数講義の値を見てみると，総合評価については前期・後期ともに上昇している．前期は 3 年前の水準に，後期は過去最高で 3.3 を軽く突破し，100 人未満の授業の値に接近している．

・以上のような数値を見るに，一般教育科目全体としてはひとまず安心してよい状況とは言える．開講して 3 年目のオムニバス授業「日本の文化と社会」（学術教養センター教員 12 名が担当）や上級生向けの一般教養科目をはじめとして，授業内容の工夫と改善を目指した工夫が継続して行われており，その成果もあるであろう．しかし，年度ごとの科目や授業内容の相違に大きく左右されることも考慮すべきである以上，授業改善の結果が現れたと見なすには，さらに数年の経過を見るべきであろう．

2.5.2　授業公開

授業公開は，この 4 年間随時公開とし，担当教員に事前連絡のうえ参観することを原則としている．今年度も学術教養センターの方針で随時公開という形で進めることが決まり，経過を観察した．2012 年度は，このことによる積極的な参観報告は提出されていない．なお，前期開講のオムニバス形式授業である「日本の文化と社会」は，学術教養センター教員 12 名が関わる授業であるが，3 年目となる本授業は，一部の教員が入れ替わったものの昨年度から継続して担当する教員が多く，昨年度以上に他の教員の授業を参観する必要性や意欲が下がったと思われ，自らの担当時間以外に授業に出席する教員がほとんど見られなかった．参観経験のある授業を再び参観する必要性が薄くなるのはある意味当然であり，このことを問題視するには至らない．が，その他の随時公開授業全てを鑑みるに，参観が少ない理由は他にもある．あくまでも一例だが，従来より時間を費やす研究に加え，大学の事情により雑務が増えれば，時間が削られる．さらに，教育面でも，自らの授業の質を高めようとすれば，教材研究や学生への指導といった，直接的な教育に時間を割く必要も増える．そうなれば自ずと授業公開への参加が難しくなろう．

ともあれ，現況では教員の消極性がやや見られるものの，学生による授業評価の結果と照らし合わせると，随時公開の形で多くの授業を開放し続ける路線を変更すべき積極的理由はない．同時に，主体的に教育の質を高めようとする教員の意欲を後押しするという大原則の

もと，一般教育科目における改善点，成功例そして反省点を踏まえつつ，公開授業への積極的な参観を呼びかけ続けることは，変わらず必要であろう．

2.5.3　FD 研修

学術教養センター独自の研修イベントはないが，F レックスの研修事業に参加している．

○ 第 3 回 F レックス合宿研修会

日 時 2012 年 9 月 3 日～4 日

会 場 仁愛女子短期大学

参加者 山川 修 教授

研修会報告 山川 修

2012 年 9 月 3 日～4 日にかけて，仁愛女子短大を会場に第 3 回 F レックス合宿研修会が開催されたので参加した．今回の合宿研修会のテーマは「学習の質の評価」，「キャリア教育」，「ティーチング・ポートフォリオ」の３つである．

「学習の質の保証」に関しては，京都大学・高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授による講演がまず行われ，それに続き，仁愛大学，福井県立大学，福井工業大学，仁愛女子短期大学から，学習評価と質保証を実践されている先生方による事例法報告，松下先生も含めた全員でパネルディスカッションが行われた．松下先生の講演は，学習評価に関して，理論的総括的に行われ，頭の中の整理ができた．それに続く事例報告およびパネルディスカッションでは，理論と実践をどうつなぐのだろうという問題意識で聞いていた．

「キャリア教育」では，企業の立場からキャリア教育に対して，福井商工会議所青年部の高木氏と朝田氏にお話していただき，その後，大学の立場から，福井大学，敦賀短期大学，福井県立大学でキャリア教育を担当している教員が報告をした．その後，フリーディスカッションに移り，キャリア教育に対する企業の視点と大学の視点のすり合わせを行った．

「ティーチング・ポートフォリオ」は 2 日目の午前中に行われ，大学評価・学位授与機構（現在は東京大学）の栗田佳代子准教授からティーチング・ポートフォリオに関する講演と，実際にティーチング・ポートフォリオの最初を体験する「ミニワーク」を行った．ミニワークは普段教員が実施している教育内容から，その底に流れる理念に迫っていくというボトムアップの手法である．また，ミニワークを行った後，隣の 2 人で，それを説明しあい，より考えを深めて行くという作業は，ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップの簡易版になっているといえる．F レックスでは，この講演とミニワークでティーチング・ポートフォリオの評判が良かったので，3 月に 3 日間で実施するティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを実施し，5 名の参加者がティーチング・ポートフォリオを作成した．また，参加者をサポートした 5 名のメンターにとってもワークショップからかなり刺激を受けることができたようなので，2 回目のワークショップ開催に向けて動き出している．

3. 点検と課題

生物資源学部　加藤久晴

3.1　授業評価

（１）授業評価アンケートの実施

2011年度より，授業評価アンケートの質問数は5項目（Q1この授業に意欲的に取り組みましたか：「意欲的」，Q2先生の講義の方法はどうでしたか：「授業方法」，Q3授業中の内容はどの程度理解できましたか:「内容理解」，Q4この授業の分野への関心は高まりましたか：「関心」，Q5この授業を総合的に評価して下さい：「総合」）となっており，Q6は学生の自由記述欄となっている．また，Q7として，教員が独自に設問をすることができるようにもなっている．なお，アンケートの実施方法（期間，回答時間等）は従来通りである．

（２）授業評価結果の経年特性

上記の5項目について，2007年度以降の部局平均値の経年変化を図1（前期）および図2（後期）に示した．なお，2009年度より海洋生物資源学科が学部化されたことから，それ以前のデータは生物資源学部全体（生物資源学科と海洋生物資源学科）のデータを両学部で便宜的に使用していることに注意されたい．

経年変化に対する部局ごとの点検・対応等は各部局のFD活動の項に記述されているので，そちらを参照していただきたい．

従来と同様，データに示されたほぼすべての年度において，授業の質に関係する「総合」は高いが，学力に関係する「内容理解」が低いという傾向が見られる．また，教員と学生の両者に関係する「関心」については，前後期とも看護福祉学部で高い値で推移しているが，後期では海洋資源学部・生物資源学部においてわずかに減少傾向である．全項目の総合的な動向として，特に昨年度との比較だけに絞ると，おおむね安定あるいは上昇傾向にあると言えよう．細かく言えば2012年度の前期では看護福祉学部および経済学部においては上昇，その他の学部では横ばいあるいは若干の減少傾向であり，後期においては一般教養および経済学部では上昇，その他の学部では横ばいあるいは若干の減少傾向という結果となった．

（３）課題

今年度は授業評価アンケートの項目を変更して 3 年目であるが，それ以前のデータと比較して「内容理解」が顕著に低いレベルで推移している点が懸念される．ただ，昨年の値と比較すると大きな変動は無く，先に述べたようにおおむね安定していると言えるかもしれない．近年，ゆとり教育に起因すると思われる学生の質の変化，特に学力の低下を多くの教員が感じているが，本年度の結果は多くの教員による授業改善の努力を反映しているものと思われる．

しかしながら，授業評価アンケートについては，以前より評価結果の信頼性に対する疑問

が上げられている．例えば，内容が簡単・単位取得が容易である授業などでは値が高くなり，抽象的・難しい内容を扱う授業では値が低くなる，などの意見をたびたび耳にする．このように，ラクして評価が高いとなると教員にとってはメリットであると感じられるかもしれないが，学生の質を保証するものとはかけ離れたものになるだろう．難しい内容であっても，学生の好奇心や積極性を引き出すことができれば良いのだが，なかなかうまくいかないのが現状だと思われる．授業に対する学生の本音は自由記述欄にあると思われるが，実際は空欄がかなり目立ち，教員にとってはコメントを返しにくいケースが多い．自由記述欄を充実させるためには，昨年の報告書にも記したように，学生が真剣にアンケートに答えてもらう手段を検討することが重要であると思われる．ただ，記述内容が成績に影響することを学生が懸念している可能性があるため，授業評価アンケートの結果が教員に手渡されるのは成績登録の後であり，評価に影響することは無いことを予めアナウンスする必要があるかもしれない．授業評価の実施に対する問題点としては，第3回の議事録にもあるように，評価結果およびそれに対するコメントの公開は講義終了後であることから，履修した学生へすぐにフィードバックできないという点があげられる．また，現在の授業評価は，教員にとっての振り返りにはなるものの，必ずしも学生のためにはなっていない可能性がある．それゆえ，本年度の後期において実施を依頼した「授業期間の半ば頃に学生との対話をする時間を設ける」という取り組みは，この問題点の解消の一助となる可能性がある．これは，教員が学生との双方向のやり取りを介して理解度等を把握し，可能な範囲内でそれに対するアクションを授業が行われている期間に反映させることを期待したものである．LMSやミニッツペーパーなどを含めたさまざまな方法による学生とのやり取りは，学生の内面を把握する上でも有用であると思われる．現時点ではこの取り組みを第三者が評価することを想定していないが，今後，授業アンケートに，「教員は授業期間に学生との対話をする時間を設ける」ことに関する問いを入れるのも1つの方法であろう．

本年度のアンケート結果から判断すると，全学的には悪い方向には向かっていないと思われるが，これまでの評価方法がマンネリ化している感も否めない．今後大きく授業改善を行う必要に迫られた場合には，その内容や方法に対して専門家を交えて検討するべきであろう．なお，教員が授業改善に真摯な態度で取り組むため，学生にも真剣にアンケートに取り組んでもらいたいとの思いから，アンケートを記名式にすることを検討したが，過半数の部局において反対の意見が出されたため，本年度は従来同様に無記名式で実施することとなった．

3.2　授業公開と研修

本学における授業公開は2004年度後期に全学的に開始され，2007年度から各部局の実情に即した内容により実施されるようになった．例年，公開を実施した教員および参観した教員からは有益であるという感想を得ているが，近年はどの部局においても参加者が少なく，メンバーも固定され，マンネリ化が進んでいるというのが現状である．本年度も経済学部および海洋資源学部では実施されたものの，他部局では参観希望者がおらず，実施には至らないケースが多かった．授業公開および参観を全教員の義務とする案もたびたび出されているが，すでに実施している他大学においても形骸化しつつあるとのことである．各教員の自発的な

改善を期待するならば，参考のために評価の高い授業を全学的，あるいは部局ごとに公開することも手段の1つと思われる．極端に評価が低い場合には，部局長等が授業アンケートの結果および自由記述欄を参考にしつつ，個別に何らかの提言をする必要があるだろう．

本年度の研修に関しては，学内研修が4回，学外研修が2回行われ，いずれにも看護福祉学部を中心に多くの教員が参加した．Fレックス内のFDチームの企画による第3回FD研修会が仁愛短期大学において行われ，本学からは各部局から計8名が参加した．テーマは授業改善に係る内容であり，ワークショップも開催され，参加者にとって大変有意義なものであった．また，2013年3月18日～20日に本学において開催されたティーチングポートフォリオ作成ワークショップ（TPWS）には仁愛女子短大から2名，福井県立大学から2名，福井工大から1名が参加し，スーパーバイザーとして北野健一先生（大阪府大高専），メンターとして本田知己先生（福井大学），田中洋一先生（仁愛女子短大），杉原一臣先生（福井工大），山川修先生（福井県大）の指導のもとに実施された．この他、2012年12月1日に、本学キャリアセンターおよび日本キャリアデザイン学会北陸支部主催によるキャリア教育シンポジウム（テーマ：キャリア教育の方向性と効果を考える）が国際交流会館にて開催された。教員にとって本来の業務以外にエネルギーを投入することはなかなか難しいが，FDに対する意識を少しでも高めるためにも，今後も学内・学外問わず多くの教員による企画および参加を期待する次第である．

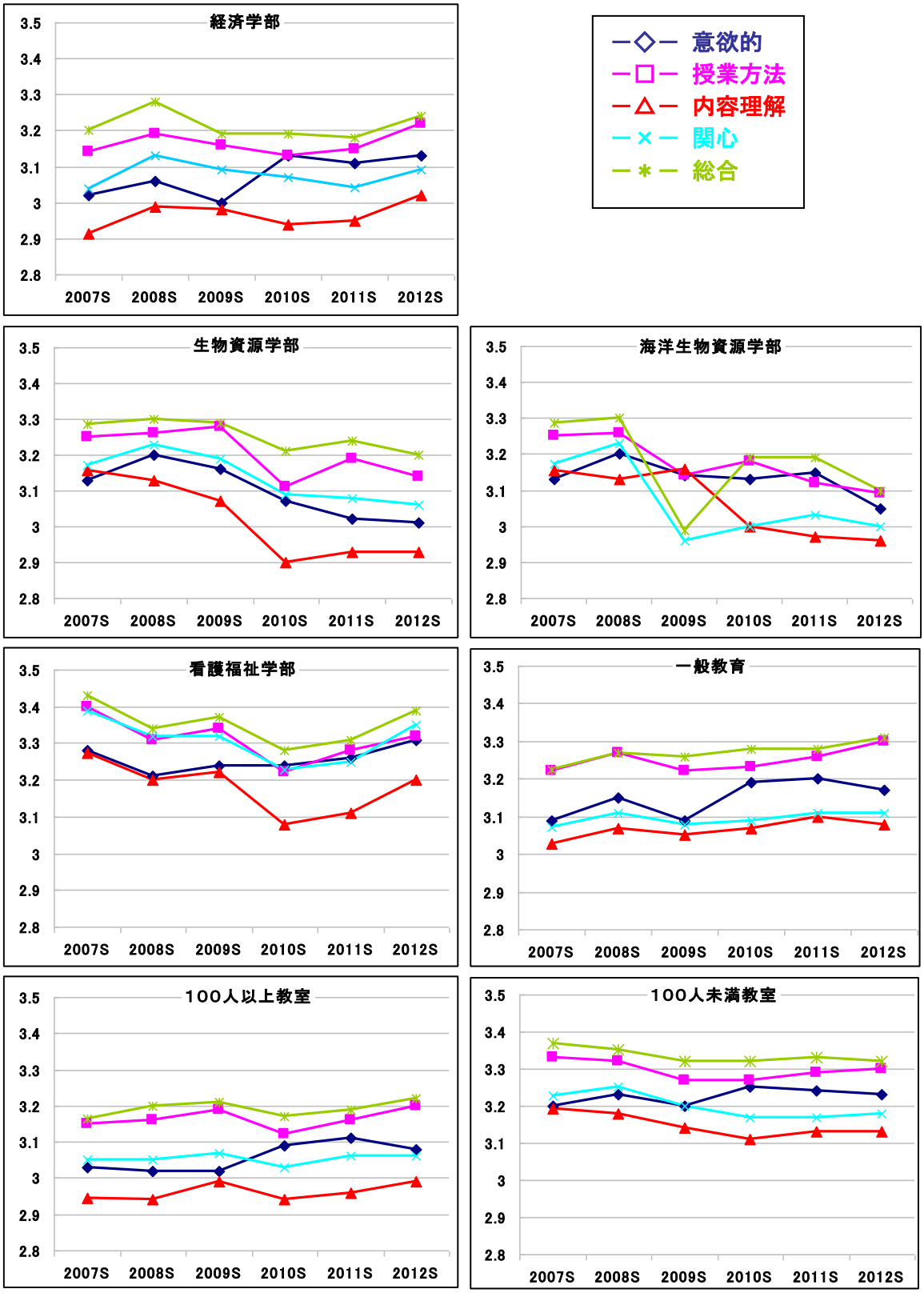


図１　重要項目の経年特性（前期）

（注）
・「意欲的」は学生の授業に対する意欲、「授業方法」は授業の進行方法、「内容理解」は学生の満足度や学力、「関心(が高まった)」は、教員と学生双方の努力、「総合(評価)」は授業の質、に各々関係していると考えている。
・軸の数値 2007S の S は春学期（前期）を、次項の F は秋学期（後期）を意味する。

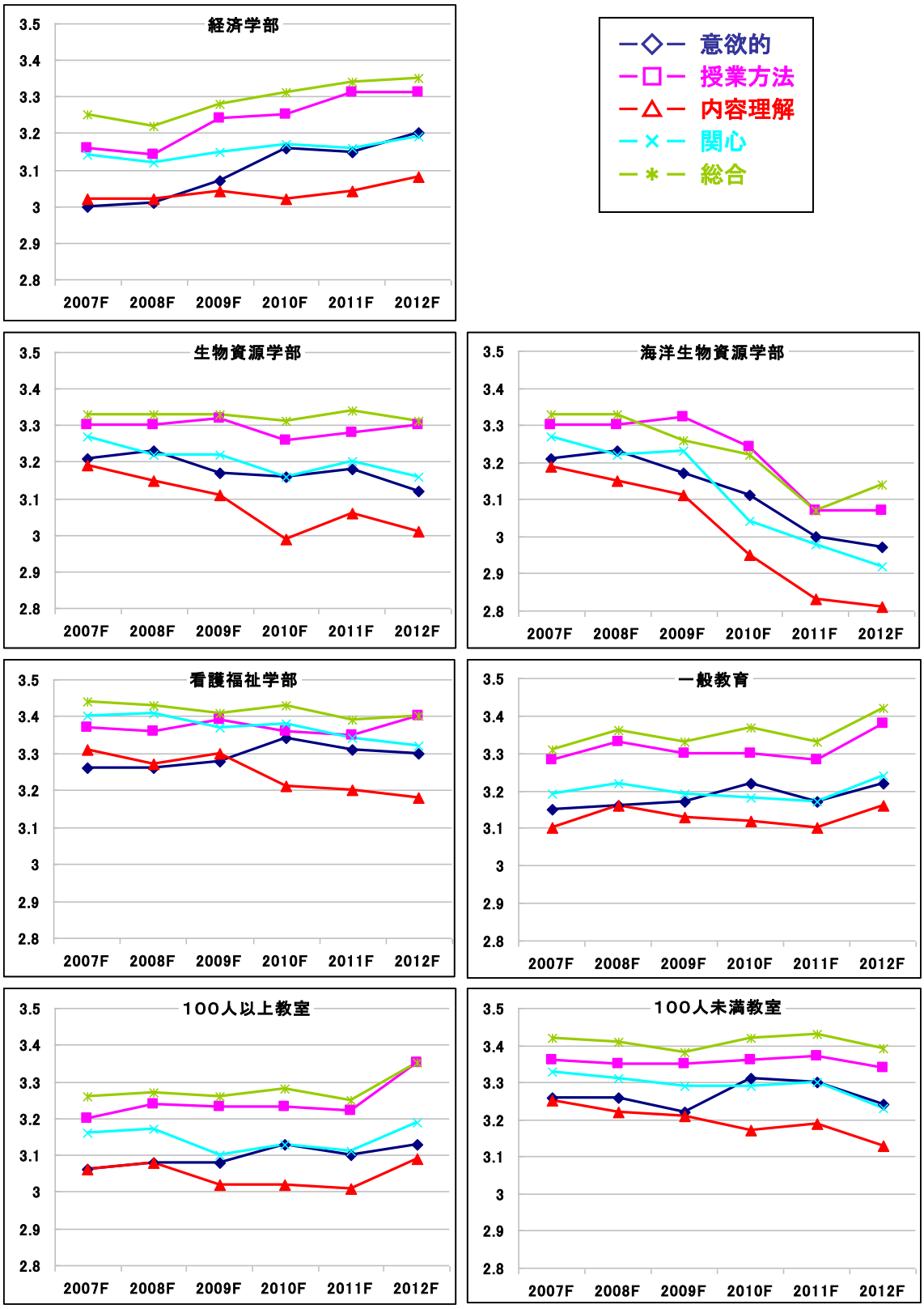


図２　重要項目の経年特性（後期）

おわりに

FD活動は平成20年の大学設置基準の改正を受けて，すべての大学において実施することが義務化されました．そして本学の教育・学習支援チームの主な活動は，ホームページにもありますように，本学の教育力の向上を目指し，教員の教育活動と学生の学習を支援することとなっています．その活動の1つである授業評価アンケートについて，本年度前期における学生の自由記述欄に対するコメント回収率は全体で84.6％と非常に高いものとなり，昨年度の79.4%よりもさらに向上しました．中には回収率が100%であった部局もあり，これまでの本学におけるFD活動の結果，授業改善に対する意識が徐々に高まりつつあることを示していると思われます．

その一方で，以前より本学の FD 活動のマンネリ化が指摘されており，この状況は多くの他大学においても問題視されています．FD 活動は教員の自主的・自発的な授業改善をサポートするものであり，強制を強いるものではないのですが，授業アンケートによる具体的な数値が示されると，何らかの対応をしなければならないという義務感が生じます．アンケートによる数値は必ずしも実情を反映したものではないにも関わらず，この数値に対応すべく義務的な作業を淡々とこなした結果，疲労感・徒労感のみが残れば，結局マンネリ化してしまうのも仕方がないと思われます．教育改善を継続的に推進するための具体的なアイデアは特にありませんが，試行錯誤のみに終始してしまう現状を打破するためにも，大学教育の専門家を擁し，そして教育に関する情報の収集・整理・評価・発信等を担う IR（Institutional Research）機能を併せ持つ新しい体制を作る必要性を検討しても良いのではないでしょうか．なお，部局ごとに教育の方針に違いがあり，学生・教員も多種多様であることから，共通のルールを作るのではなく，各部局で異なるアプローチがあっても良いと個人的には考えています．いずれにせよ，マンネリ化しているとはいえ，学生の質を保証するためにも FD 活動，とりわけ教育改善の試みを怠ることはできません．

最後になりましたが，チームの運営およびこの報告書を作成するに当たり，坂田幹男チーム長，委員の先生方，そして事務局には多大な労力をかけていただきました．この場をお借りして，厚く御礼申し上げます．

教育学習支援チームFD担当リーダー　加藤久晴

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2012

発 行 年 月　2013 年 3 月

編集・発行　福井県立大学教育学習支援チーム